



令和6年度 郡山市中學生長崎派遣事業

2024 ナガサキへのメッセージ

← 報告書 →



郡山市・平和を考える市民の集い実行委員会

郡山市核兵器廃絶都市宣言

(昭和59年6月15日議決)

世界恒久平和実現のために、核兵器を廃絶することは、人類共通の願望である。

核兵器は人類と地球の命運を左右するにもかかわらず、新しい軍事技術の開発が続けられている。

わが国は、世界で唯一の核被爆国として、平和を愛するすべての国の人々とともに、人類の安全と生存のため不断の努力を続けるべきである。

郡山市は、日本国憲法に基づいて、核兵器の完全廃絶と軍備縮小を全世界に訴え、人類の願いである世界平和の実現を希求し、核兵器廃絶都市であることを宣言する。



令和6年度 郡山市中學生長崎派遣事業

「2024 ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて

郡山市長 品川 萬里

1945年8月。広島と長崎に投下された原子爆弾により、街は一瞬にして廃墟と化し、数多くのかけがえのない命が奪われました。また、今なお多くの被爆者の方々が後遺症で苦しんでおられます。

本市におきましても、4度にわたる空襲により大きな被害を受け、500名を超える尊い命が犠牲となりました。あの悲惨な戦争の終結から79年が経過し、戦争の記憶が風化しつつある今、私たちは当たり前のように平和を享受しております。

しかし、世界情勢は大きく変化しており、世界各国で武力が行使され、また、核の脅威が高まり、国際社会の平和と秩序が脅かされる今、私たちは平和について、これまで以上に考えなければならない状況にあります。

今日の平和が、先の大戦の大きな犠牲の上に築かれた、かけがえのないものであることを決して忘れてはなりません。

被爆者の平均年齢が85歳を超え、戦争や原子爆弾の恐ろしさを直接経験された方々が減少していく中で、今後、核兵器使用により引き起こされた惨禍が二度と繰り返されることのないよう、その廃絶を願う全ての人々の思いを引き継ぎ、次の世代に伝えていくことは、平和な時代に生きる私たちの責務であります。

そのため、「核兵器廃絶都市」を宣言する本市では、「平和を考える市民の集い実行委員会」との共催により、1996年から次代を担う中学生を被爆地へ派遣する事業を実施しており、今年も、市内各校の代表生徒に役員を加えた派遣団32名を長崎市へ派遣いたしました。

参加された中学生の皆さんは、原爆資料館や永井隆記念館、旧城山国民学校校舎の見学、平和祈念式典への参列をはじめ、青少年ピースフォーラムでの被爆体験講話や平和学習などへの参加を通して、戦争の悲惨さや原子爆弾による被害の恐ろしさ、命の大切さなど、たくさんのことを学んだことと思います。

中学生の皆さんには、被爆地長崎での経験を今後の成長の糧にさせていただくとともに、4日間の研修を通して学んだことを家族や友人などできるだけ多くの方々に話し、平和の大切さを伝えていただきたいと思います。

この報告書には、参加された中学生28名が、平和の尊さや核兵器廃絶の必要性について学んだことや感じたことについて、それぞれの言葉でまとめられています。この報告書が一人でも多くの方々にご覧いただけることを願うとともに、平和について考えるきっかけといただければ幸いです。

長崎市の皆様には、当市派遣団を今年も温かく迎え入れていただき、この場を借りて、改めて御礼を申し上げます。

結びに、本事業の実施に当たり多大なる御支援、御協力をいただきました関係者の方々に心から感謝を申し上げまして、挨拶といたします。



令和6年度 郡山市中學生長崎派遣 「2024 ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて

郡山市教育委員会教育長 小野 義明

市内の中学校・義務教育学校から選出された皆さんは、令和6年度郡山市中學生長崎派遣団員として、令和6年8月7日から4日間長崎市を訪問しました。長崎市長に「平和へのメッセージ」を伝える重要な役割を担った皆さんは、きっと平和の尊さや核兵器廃絶の必要性を強く認識されたことと思います。

79年前の8月9日、原子爆弾の投下により、長崎の街は一瞬で焼け野原となり、多くの尊い命が奪われました。被爆された方々は、癒えることのない傷を負い、今もなお、後遺症や健康への強い不安に苦しみ続けています。さらに、被爆者の高齢化が進み、被爆体験の記憶を今後どう受け継いでいくのかが問われております。

そのような中、これからの時代を担う皆さんが、長崎平和公園や爆心地公園、原爆資料館を見学したこと、平和祈念式典や青少年ピースフォーラムに参加したことなど、長崎の地に実際に立ち、自らの目で確かめ、意見を交換した体験は、平和への思いを受け継ぐ意味で、とても意義深いことであると感じています。また、今年度は、市制施行100周年・核兵器廃絶都市宣言40周年記念「ヒロシマ原爆・平和展」オープニングセレモニーに参加し、戦争や核兵器の恐ろしさを理解できたことも、きっと大きな財産になったことと思います。

この報告書は、長崎で様々なことを体験した皆さんが、実際に感じ取ったことを、平和へのメッセージとしてまとめたものです。どのページを見ても、一人一人の平和への思いが、それぞれの言葉でつづられています。私は、参加した皆さん全員が、核兵器が及ぼす悲惨さや、平和の大切さに触れるとともに、「未来の平和」のために自分自身ができることに取り組んでいこうとする強い決意を述べていることに、大きな感動を覚えました。

皆さんには、この派遣事業を通して学んだことを多くの方々に語り伝えるとともに、平和で持続可能な社会の担い手として健やかに成長されることを切に願っております。

結びに、所期の目的を達成され、立派な報告書を完成させた皆さんと、派遣に御尽力いただいた関係者の皆様をはじめ、御協力をいただいた保護者の皆様に心より感謝申し上げます。また、本市の中學生を温かく受け入れ、全世界に向けた長崎平和宣言の中で「長崎は、平和をつくる力になろうとする地球市民との連帯のもと、他者を尊重し、信頼を育み、話し合いで解決しようとする『平和の文化』を世界中に広めます。そして、長崎を最後の被爆地にするために、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けてたゆむことなく行動し続けることをここに宣言します。」というメッセージを発信された長崎市長をはじめ、長崎市の皆様の益々の御健勝と御発展を御祈念申し上げ、挨拶といたします。

目 次

【 事 業 内 容 】

平和へのメッセージ	1
事業概要	3
派遣団名簿	5
研修行程	6

【 研 修 風 景 】

集合写真	7
写真で綴る研修風景	8

【 団 員 報 告 】

猪股 歩華	(日和田中学校)	13
本名 翔真	(行健中学校)	15
鈴木 康平	(明健中学校)	17
森 紗那	(安積中学校)	19
伊東 郁陽	(安積第二中学校)	21
野田 采里	(三穂田中学校)	23
石井 航瑠	(逢瀬中学校)	25
佐藤 瞳	(片平中学校)	27
本田 輝	(喜久田中学校)	29
後藤 月奈	(熱海中学校)	31
佐藤 心乃	(守山中学校)	33
仁井田 稜士	(高瀬中学校)	35
山口 翔乎	(郡山第一中学校)	37
木村 壬桜莉	(郡山第二中学校)	39
西山 遥大	(郡山第三中学校)	41
柳沼 真結	(郡山第四中学校)	43
石垣 凜空	(郡山第五中学校)	45
渡邊 采音	(郡山第六中学校)	47
遠藤 暖心	(郡山第七中学校)	49
齋藤 凜香	(緑ヶ丘中学校)	51
星 温斗	(富田中学校)	53
太田 有咲	(大槻中学校)	55
景山 陽向	(小原田中学校)	57
宗像 奏佑	(宮城中学校)	59
横田 絢美	(御館中学校)	61
遠藤 宗介	(郡山ザベリオ学園中学校)	63
遠藤 朱莉	(西田学園)	65
加藤 結愛	(湖南小中学校)	67

§ 事業内容 §

平和へのメッセージ

戦後79年を迎え、原子爆弾の犠牲となられた多くの方々に哀悼の意を捧げます。

また、今なお被爆による後遺症に苦しんでおられる皆様にお見舞いを申し上げます。

貴市におかれましては、市民の皆様のたゆまぬ御努力により、原子爆弾の凄絶な被害を乗り越えられ、今日の発展を築かれました。

また、平和に対する揺るぎない御意思のもと、世界の先頭に立ち、自らがお受けになられた惨状を日本国内はもとより世界中の人々に伝え、「世界の恒久平和」と「核兵器廃絶」の実現を目指し、積極的な活動を長年にわたり展開されておりますことに、心から敬意を表します。

終戦から79年が経過し、戦争や原子爆弾の恐ろしさを直接経験された方々も御逝去され、国民の多くが戦争を知らない世代となりつつある中で、戦争や被爆の記憶が次の世代にどう受け継がれていくかが課題となっております。

当市では、今日の平和が、多くの方々の犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを次の世代に伝えていく責務があるとの思いから、次代を担う中学生を貴市に派遣し、「戦争の悲惨さ」や「平和の持つ意義」を深く理解するとともに、想いを一にして、全国から集まる同世代の仲間たちと意見を交わし合うことを願い、様々な研修活動に参加させていただきます。

この貴重な経験を通して、参加者一人ひとりが「核兵器廃絶のために必要なこと」や「平和のために自らができること」を学び感じ取り、同世代の青少年をはじめとする多くの人々に伝え、人生の糧としてくれるものと期待しております。

本年、当市は市制施行100周年、そして核兵器廃絶都市宣言40周年の節目の年を迎えました。

私たちの願いにもかかわらず、現在もなお、世界各地において武力が行使され、また、核の脅威が高まり、国際社会の平和と秩序が脅かされる事態が進行しております。

今後とも、貴市で起きた人類史的惨禍が二度と繰り返されることのないよう、我々も国境や民族を超えた連帯・信頼により、「核兵器のない世界」及び「世界の恒久平和」の実現に向け、不断の努力を重ねてまいります。

結びに、「核兵器廃絶」及び「世界の恒久平和」の実現を強く念願いたしますとともに、貴市の益々の御発展並びに長崎市民の皆様の御健勝と御活躍を心から御祈念申し上げます、メッセージといたします。

令和6年8月9日

長崎市長 鈴木 史朗 様

郡山市長

品川 萬里

令和6年9月10日

郡山市

市長 品川 萬里 様

長崎市長 鈴木 史朗

平和メッセージに対する御礼

残暑の候、貴台におかれましてはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

去る8月9日に挙行いたしました「被爆79周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」に際し、貴台から「平和メッセージ」を賜りましたことに、心から御礼を申し上げますとともに、貴台の平和に対する深い御理解と御協力に、重ねて感謝申し上げます。

79年前、戦争の悲惨さと原爆の脅威を身をもって体験した長崎市民は、「世界中の誰にも二度と同じ体験をさせてはならない」という確固たる思いで自らの体験を語り、核兵器廃絶を訴え続けてきました。

しかし、世界に目を向けますと、ウクライナ情勢や中東情勢が深刻化し、核兵器廃絶への道は険しくなるばかりか、再び使用される脅威も高まっています。

こうした混沌とした時だからこそ、私たち市民社会が声を上げ、力を合わせて世論の大きなうねりをつくっていくことが肝要です。

長崎市は、これからも核兵器のない世界の実現を訴えてまいります。

皆様方におかれましては、志を同じくする大切な仲間として連帯しながら、そして次の世代にしつかりとバトンをつなぎながら、共に歩まれることを期待しています。

最後になりましたが、貴台のご健勝と今後ますますの御活躍を心からお祈り申し上げます。

令和6年度 郡山市中學生長崎派遣事業 「2024 ナガサキへのメッセージ」 事業概要

1 趣旨

市民の多くが戦争を知らない世代となりつつある中で、今日の平和が、先の大戦の大きな犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを忘れてはならない。

これを次代に伝えるのが今日に生きる私達の使命であると考え、「核兵器廃絶都市」を宣言する本市における平和への取り組みとして、平和の尊さ、核兵器使用の悲惨さとその廃絶の必要性を認識してもらうことを目的に、感受性豊かな中学2年生を被爆地である長崎市へ派遣して、研修活動を実施する。

また、報告会及びパネル展の開催や報告書の作成・配布等を通して、本市の取り組みについて広く市民への周知を図る。

2 主催 郡山市／平和を考える市民の集い実行委員会

3 事業内容

(1) 事前学習会

市制施行100周年・核兵器廃絶都市宣言40周年を記念して、広島平和記念資料館が所有する被爆瓦等本物の被爆資料や被災写真等のパネル展示を行う「ヒロシマ原爆・平和展」の見学等を行う。

ア 開催日 令和6年7月20日（土）

イ 開催場所 けんしん郡山文化センター

ウ 内 容 オープニングセレモニー（広島市被爆体験講話・「郡山戦災史」の朗読会等）への参加、「ヒロシマ原爆・平和展」見学

(2) 派遣団結団式及びオリエンテーション

ア 開催日 令和6年7月26日（金）

イ 会 場 郡山市役所特別会議室

ウ 内 容

(ア) 結団式 団員証交付、「平和へのメッセージ」付託、「折り鶴」付託、
団員代表あいさつ

(イ) オリエンテーション

(3) 派遣研修

ア 派遣先 長崎市

イ 派遣人員 32名(役員4名、団員28名)

ウ 派遣期間 令和6年8月7日(水)～10日(土)

エ 主な研修内容

(ア) 永井隆記念館(如己堂)見学(8月7日)

(イ) 平和公園及び長崎原爆資料館見学(8月7日)

(ウ) 「平和へのメッセージ」伝達(8月7日)

(エ) 青少年ピースフォーラム(平和学習)参加(8月8日～9日)

(オ) 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列(8月9日)

(4) 郡山市戦没者追悼式

平和の尊さを次の世代に継承するため、式の中で郡山市中學生長崎派遣事業に参加した中學生代表による「平和へのメッセージ」の発表を行う。

ア 発表者 代表者3名

イ テーマ 「平和へのメッセージ」

(5) 報告会

ア 開催日 令和6年11月23日(土)

イ 会場 郡山市役所特別会議室

ウ 内容 (ア) 被爆体験伝承者講話

(イ) 派遣団員による研修報告

(6) 写真パネル展・原爆パネル展

派遣団員が研修を通して撮影した写真に自身の平和へのメッセージを添えて展示する「写真パネル展」及び原爆に関する資料(日本非核宣言自治体協議会提供のポスターほか)を展示する「原爆パネル展」を開催する。

ア 第1回 (ア) 期間 令和6年11月23日(土)～12月6日(金)

(イ) 会場 郡山市役所アートスペース

イ 第2回 (ア) 期間 令和7年2月1日(土)～2月15日(土)

(イ) 会場 郡山市中央公民館

(7) 報告書

派遣研修の成果についてまとめた『令和6年度 郡山市中學生長崎派遣事業「2024 ナガサキへのメッセージ」報告書』を作成し、関係機関へ送付する。また、報告会及びパネル展会場において来場者に配布する。

令和6年度 郡山市中学生長崎派遣団 派遣団員名簿

役 員

役職名	氏 名	所 属
団 長	佐 藤 嘉 洋 さとう よしひろ	郡山市総務部次長兼総務法務課長
副団長	吉 田 雅 史 よした まさし	平和を考える市民の集い実行委員会監事
支援者	小 林 延 匡 こばやし のぶまさ	郡山市立大槻中学校教諭
事務局	小 林 拓 司 こばやし たくし	郡山市総務部総務法務課主査

団 員

番号	学 校 名	氏 名
1	日和田中学校	猪 股 歩 華 いのまた ほのか
2	行健中学校	本 名 翔 真 ほんな しょうま
3	明健中学校	鈴 木 康 平 すずき こうへい
4	安積中学校	森 紗 那 もり さな
5	安積第二中学校	伊 東 郁 陽 いとう ふみはる
6	三穂田中学校	野 田 采 里 のだ あや里
7	逢瀬中学校	石 井 航 瑠 いし いわたる
8	片平中学校	佐 藤 瞳 さとう ひとみ
9	喜久田中学校	本 田 輝 ほんだ ひかる
10	熱海中学校	後 藤 月 奈 ごとう るな
11	守山中学校	佐 藤 心 乃 さとう ここの
12	高瀬中学校	仁井田 稜 士 にいた りょうじ
13	郡山第一中学校	やまぐち しょうこ 山口 翔 乎
14	郡山第二中学校	木 村 みお 莉 きむら みお 莉

番号	学 校 名	氏 名
15	郡山第三中学校	西 山 遥 大 にしやま ようた
16	郡山第四中学校	柳 沼 眞 結 やぎぬま まゆ結
17	郡山第五中学校	石 垣 凜 空 いしがき りく空
18	郡山第六中学校	渡 邊 采 音 わたなべ こと音
19	郡山第七中学校	遠 藤 暖 心 えんどう はると心
20	緑ヶ丘中学校	齋 藤 凜 香 さいとう りんか香
21	富田中学校	星 温 斗 ほし まさと斗
22	大槻中学校	太 田 有 咲 おおた ありさ咲
23	小原田中学校	かげやま ひなた向 景 山 陽 向
24	宮城中学校	むなかた そうすけ 宗 像 奏 佑
25	御館中学校	よこた あみ美 横 田 絢 美
26	郡山ザベリオ 学園中学校	えんどう そうすけ 遠 藤 宗 介
27	西田学園	えんどう あかり莉 遠 藤 朱 莉
28	湖南小中学校	かとう ゆあ愛 加 藤 結 愛

「2024 ナガサキへのメッセージ」研修行程

8月7日(水)

5:00集合 郡山市役所
 5:00 出発式
 5:10 バス
 9:20 羽田空港
 10:50 飛行機 ANA663 ※機内にて昼食(弁当)
 12:40 長崎空港
 13:30 バス
 14:30 如己堂・永井隆記念館
 15:00 バス
 15:05 城山小学校
 15:45 バス
 16:10 山王神社(車窓)
 16:40 バス
 眼鏡橋
 17:00 宿舎
 17:30 夕食・ミーティング
 19:00 バス
 スロープカー
 19:30 稲佐山展望台
 20:30 バス
 21:00 宿舎
 22:30 就寝

8月8日(木)

6:30 起床
 7:10 朝食
 8:30 宿舎
 バス
 8:45 浦上天主堂
 9:30 バス
 9:40 長崎平和公園・原爆資料館
 (市長メッセージ伝達)
 12:10 昼食(和泉屋)
 13:20 青少年ピースフォーラム1日目(平和会館)
 14:00
 17:30 バス
 18:00 青少年ピースフォーラム交流会
 (長崎新聞文化ホール) ※軽食
 19:30 バス
 19:45 宿舎
 20:30 夕食・ミーティング
 21:00
 22:30 就寝

8月9日(金)

6:30 起床
 7:00 朝食
 8:20 宿舎
 バス
 8:50 平和祈念式典
 (平和公園/出島メッセ長崎)
 11:50
 12:10 昼食
 (四海楼)
 13:10
 13:30 青少年ピースフォーラム2日目(出島メッセ長崎)
 16:00 バス
 16:30 大浦天主堂・グラバー園
 18:00 バス
 18:30 宿舎
 19:00 夕食・ミーティング
 21:30
 22:30 就寝

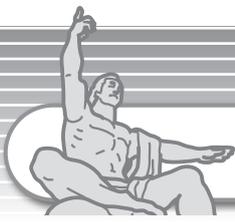
8月10日(土)

7:00 起床
 7:30 朝食
 8:50 宿舎
 バス
 9:00 出島班別
 行動
 9:50 徒歩
 10:00 長崎新地中華街
 班別行動
 10:40 徒歩
 10:55 昼食
 (出島テラス)
 11:45
 12:30 長崎空港
 13:25 飛行機 ANA666
 15:10 羽田空港
 16:00 バス
 ※軽食
 20:00 到着 郡山市役所
 20:00 到着式
 20:20

§ 研修風景 §



「平和祈念像」にて



写真で綴る長崎派遣研修風景 ①



① 7月26日に市役所で結団式を行いました。長崎での研修に向け、団員が気持ちを一つにしました。



② 8月7日朝、市役所で出発式を行いました。団員代表の伊東さんが研修に向けての抱負を発表しました。



③ 長崎に到着し、如己堂・永井隆記念館を見学しました。自らも被爆しながら平和を願い続けた博士の生涯に感銘を受けました。



④ 爆心地から約500mの距離にあった旧城山国民学校では、爆風による爪痕の残る校舎で資料を見学し、原爆の被害の大きさを知りました。



⑤ 城山小学校の現在の校舎の前に設置された少年平和像は、原爆で全てを失った城山小の児童が立ち上がる姿を表しています。



⑥ 国の重要文化財に指定されている現存最古のアーチ型石橋の一つである眼鏡橋を見学しました。



⑦日没後は世界新三大夜景にも選ばれた稲佐山展望台から長崎の街を眺め、被災から復興までの道りを感じました。



⑧2日目、浦上天主堂。カトリック信徒によって30年かけて造られましたが、原爆により壊滅的な被害を受けました。



⑨平和公園。原爆犠牲者の慰霊と世界の恒久平和を祈念して建てられた平和祈念像の迫力に圧倒されました。



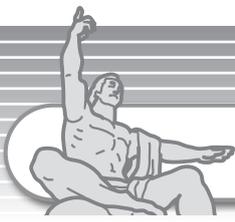
⑩平和祈念式典が行われる平和公園で、平和の鐘や平和の泉を見学しました。石碑の碑文などを真剣に読んでいました。



⑪市民の皆さんから託された千羽鶴を奉納しました。



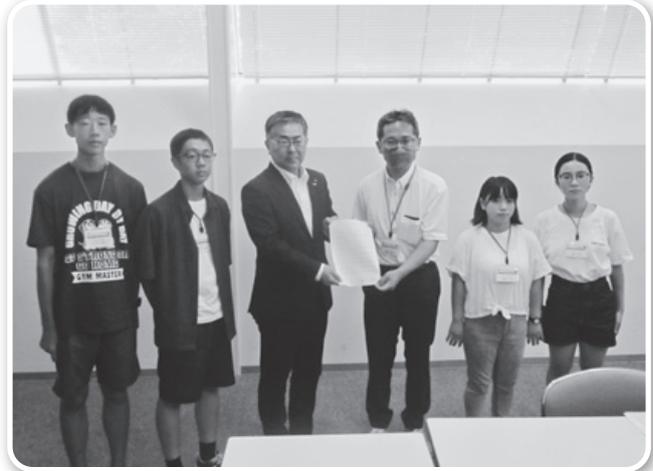
⑫原子爆弾落下中心地。原子爆弾は、松山町171番地の上空約500mで爆発しました。



写真で綴る長崎派遣研修風景 ②



⑬原爆資料館を見学しました。原爆投下の経緯・被爆の惨状・平和を希求する人々の思いに触れました。



⑭品川市長から長崎市長への「平和へのメッセージ」を、派遣団の代表が原爆資料館館長に届けました。



⑮青少年ピースフォーラムに出席。被爆体験講話では、松尾幸子さんの貴重な体験をお聴きし、原爆の無差別性、非人道性を知りました。



⑯青少年ピースボランティアに案内され向かった平和祈念館の追悼空間には、普段、原爆死没者名簿が納められています。



⑰3日目。8月9日。平和祈念式典に参列しました。平和公園で挙行された本式典に、13名の団員が参列しました。



⑱中継会場の出島メッセ長崎会場で参加した生徒たちは、献花を行い、ハンドベルの演奏や詩の朗読を聴きました。



⑱ 青少年ピースフォーラム 2 日目。全国から集まった仲間たちとケンカ・戦争の原因と解決策について話し合いました。



⑳ 青少年ピースフォーラムの最後に全員で記念撮影を行いました。



㉑ 世界遺産にも登録された大浦天主堂を見学し、長崎の歴史と文化に触れました。



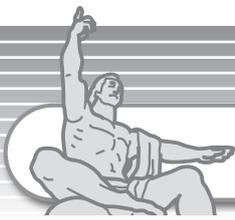
㉒ 国指定重要文化財にも指定されている住宅が集まったグラバー園を見学しました。



㉓ 3 日目のミーティング。吉田副団長から青少年ピースフォーラムの修了証書が一人一人に渡されました。



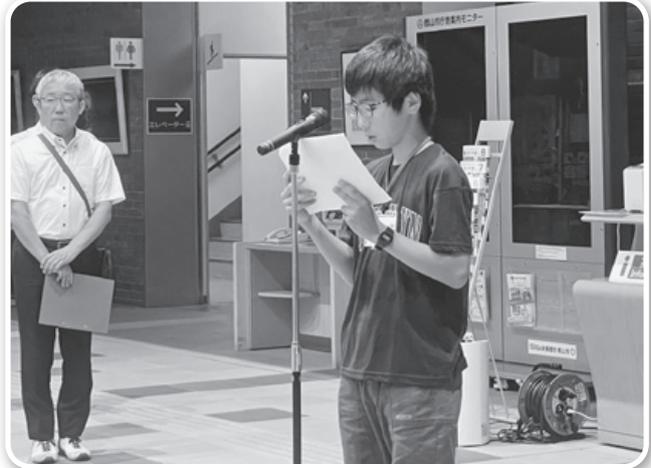
㉔ 4 日目。鎖国時代、西洋に開かれた唯一の窓口であった出島を見学しました。



写真で綴る長崎派遣研修風景 ③



②⑤ 長崎新地中華街を訪れ、異国の文化に触れました。



②⑥ 郡山に到着し、市役所で到着式を行いました。団員代表の本田さんが今後に向けての決意を述べました。



②⑦ 1班団員(左上から)鈴木 康平、仁井田 稜士(班長)、星 温斗、(左下から)加藤 結愛、太田 有咲、木村 壬桜莉、佐藤 瞳(敬称略)



②⑧ 2班団員(左上から)景山 陽向、伊東 郁陽、西山 遥大、(左下から)横田 絢美、柳沼 眞結、後藤 月奈(班長)、猪股 歩華(敬称略)

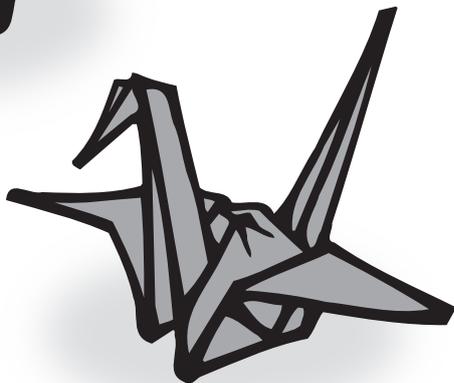
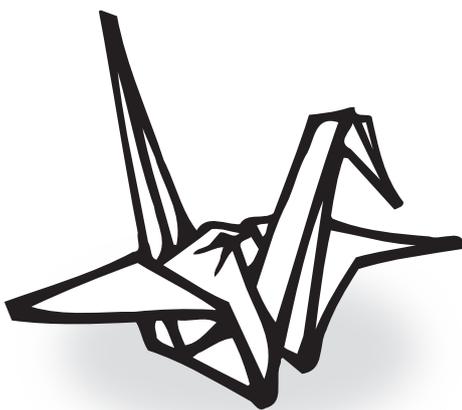


②⑨ 3班団員(左上から)本田 輝、遠藤 暖心、本名 翔真(班長)、(左下から)遠藤 朱莉、齋藤 凜香、山口 翔乎、野田 采里(敬称略)



③⑩ 4班団員(左上から)遠藤 宗介、宗像 奏佑、石垣 凜空、石井 航瑠、(左下から)渡邊 采音、佐藤 心乃(班長)、森 紗那(敬称略)

§ 團 員 報 告 §



平和をつなぐ大切さ



郡山市立日和田中学校 2年 猪股歩華

1 派遣研修への参加に当たって

私が長崎派遣事業に参加しようと思ったのは、祖母から見せてもらった「ヒロシマ原爆資料」がきっかけである。原爆資料には、熱線でただれた皮膚や白血病で体がアザだらけの人の写真が載っており、怖くなって最後まで読めなかった。原爆の威力は凄まじく、とても恐ろしい兵器だと思った。

そのため、今回の派遣研修募集を聞いた時、「恐ろしい原爆の被害を、目を背けずに自分の目で見て、戦争の悲惨さ、平和への尊さをみんなに伝えたい」と思い、この研修に参加することを決心した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

永井博士は戦争前から大学で放射線の研究をしており、白血病を患っていた。あと3年の命と診断され、その2か月後に原爆に被爆した。原爆によって妻を亡くし、自分も重傷を負ったが、被爆者の救護活動を行った。

白血病が悪化し、寝たきりとなっても、長崎の鐘などの多くの本を書き、人々に生きる勇気と希望を与えた。

永井博士は大切な妻、自分自身も多くの傷を負っているにもかかわらず、被爆者を救済し平和を願い続けた。命が尽きるまで原爆被害と向きあう永井博士の強さがすばらしいと感じた。

(2) 城山小学校

この小学校は爆心地から500mの場所にあり、最も爆心地に近い学校であった。当時1,500人の児童が通っていたが、原爆投下により約1,400人とほとんどの児童が亡くなったとされ

ている。

校舎内には、熱線で黒く炭化した瓦や亡くなった児童の冥福を祈る桜が植えられ、平和を願うモニュメントが置かれている。

その中に「カラスザンショウ」という被爆樹がある。原爆の熱線で焼かれ傾いても、そばのムクの木に支えられて生き延びた。2016年に枯れてしまったが、現在も展示され原爆のすさまじさを伝え続けている。被爆樹も支え合うことで、必死に水を吸って生き延びることができたのだと伝わってきた。

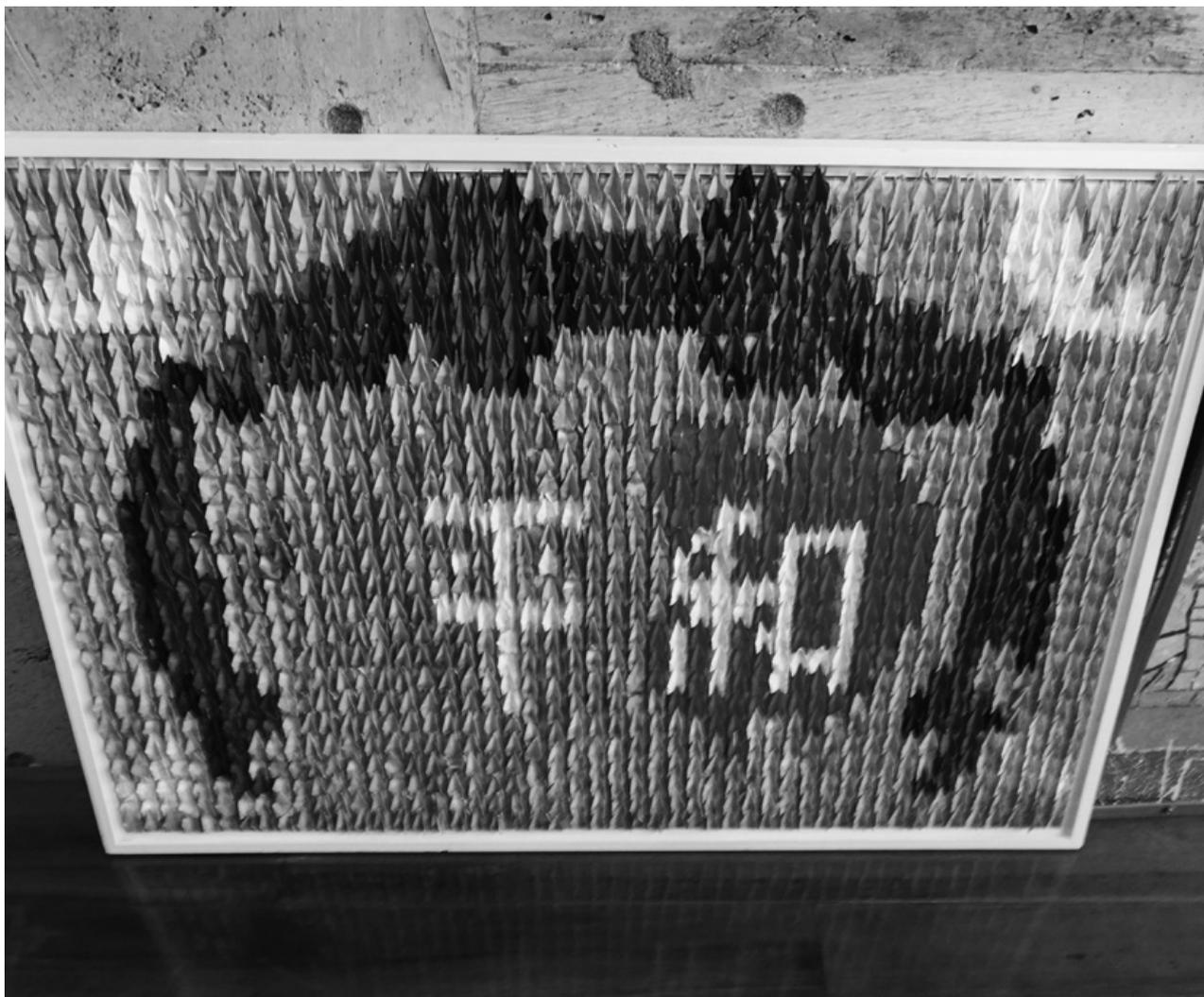
校舎内の実際の原爆被害を見て、「熱くて痛かっただろうな」「お父さんお母さんに会いたかっただろうな」など児童の気持ちを考えると、胸が締め付けられ悲慘さが伝わってきた。

(3) 被爆体験講話

8日に行われた青少年ピースフォーラムでは、11歳で被爆した松尾幸子さんの講話があった。爆心地から1.3km地点で被爆。本人は無傷だったが、弟達はケガやヤケドを負った。自宅は焼け、姉は骨だけとなり、父や兄達も建物の下敷きになり亡くなってしまったと辛い体験を話してもらった。

松尾さんが思い出すのも辛い体験を話してくれるのは、原爆の被害を理解し、平和をつないでいってほしいという願いからである。

私は、被爆体験から実感した原爆の恐ろしさを語り継いでいくことは大切なことであり、今平和を生きている私たちの使命だと思った。



＜ 平和への折り鶴 ＞

3 心に残ったこと

この写真は現在の城山小学校の児童が、二度と戦争や原爆被害を繰り返さないよう、折り鶴で「平和」という文字を作ったものである。

この写真がなぜ心に残ったかという点、「平和への願い」が子どもたちにも受け継がれていると感じたからである。

原爆で、当時の児童のほとんどが亡くなり、生き延びた児童も白血病などの後遺症に苦しんだ。

その児童たちが受けた苦しみを忘れない、そして二度と原爆被害を繰り返してはいけないという願いが強く伝わってきた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

4日間の派遣研修を通して、戦争や核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを知り、学びを深めることができた。

また他校の中学生と交流し、意見交換できたことも、考えの幅が広がり刺激となった。

研修に参加する前は、戦争や原爆被害は「怖いもの」としてあまり触れようとしてこなかった。

だが、実際に現地で原爆遺跡や被爆者の講話を聴き、79年前に起きた悲惨な戦争を受け入れ伝えていかなければならないと感じた。

いま私が生きる平和な時代があるのは、人々が戦争の悲惨さ、平和への願いを伝え続けてきたからである。私も今回の研修で学んだことを一人でも多くの人に伝え、平和の大切さをつないでいきたい。

人類が生き残るために…



郡山市立行健中学校2年 本名 翔真

1 派遣研修への参加に当たって

私が長崎派遣事業に参加しようと思ったきっかけは、平和について改めて考えてみたいと思ったからだ。パレスチナやウクライナなどで起きている戦争や紛争のニュースを見て、大変な生活をしている国民の様子に胸が痛む。どうして戦争は起きてしまうのだろうと、いつも疑問に思う。日本で起きた戦争、原子爆弾が投下されたこと、その後の長崎の発展について、きちんと学び、自分の考えを説明できるようになりたいと考えた。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

原爆資料館では、被災資料の展示や、長崎の惨状が再現されていた。

特に印象に残ったのが、長崎に落ちた原子爆弾の「ファットマン」についてだ。模型が展示されていた。長さは、3.25m、直径1.52m、重さは4.5トンある。これが投下されたことにより、大きなエネルギーが放出された。エネルギーの内訳は、爆風が約50%、熱線が約35%、放射線が約15%だ。この原子爆弾で、1つの街を簡単に破壊できる威力を持っていることを学び、核兵器の恐ろしさを知った。

熱線による被害は、多くの実物から見て取れた。例えば、溶けてくっついた瓶、真っ黒く焦げた弁当箱、一部分が焼け焦げている作業服と戦闘帽など、多くのものが展示されていた。これらは、目に焼き付いていて、忘れることはできない。これまでに感じたことのない、深い悲しみを感じる体験となった。

(2) 平和祈念式典

8月9日、11時2分、原爆が投下された時間に黙とうが始まった。79年前の同じ日、同じ時刻に原爆が投下されたのだ。たった一つの原爆が長崎という街を廃墟にし、多くの命が失われたという現実を想像した。そして、戦争や紛争のない平和な世界を築くために、核兵器は世界から一刻も早くなくなってほしいと願った。長崎市長からの言葉「今、世界で起こっているような紛争が激化し、核戦争が勃発するとどうなるのでしょうか。人命はもちろんのこと、地球環境にも壊滅的な打撃を与え、人類は存亡の危機に晒されてしまいます。」という言葉が強く胸にささった。地球を守る、人命を守るためにも、核兵器はあってはならない。長崎を最後の被爆地とするべく、戦争や核兵器の恐ろしさを伝えていきたいと思った。



＜如己堂前の石像＞

3 心に残ったこと

私が心に残ったのは、永井隆博士の人柄と信念だ。博士は、放射線科医として医学の道を歩んでいたとき、白血病を発症し、余命3年であると知らされる。そんな中、教えていた長崎医科大学で被爆し、重症となる。奥さんをその原子爆弾の被害で亡くす。その後、白血病が悪化し、寝たきりの生活の中で、様々な本を執筆し、戦争の愚かさや平和と命の大切さを訴え続けた。多くの苦悩があったにも関わらず、医師としての役割を全うする博士の行動、言動が忘れられない。

写真は、如己堂の前の石像。「玉の緒の命の限り吾はゆく寂（しず）かなる眞理探求の道 永井隆」と記されていた。「命の続く限り、眞理探求の道を歩み続ける」という彼の信念を感じた。

亡くなるまでの3年間生活していた如己堂には、博士の苦悩した一生が詰まっていると思った。今、当たり前前に生活できていることが奇跡だと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

研修に行く前は、核兵器の恐ろしさや被爆後の人体への影響については、教科書やインターネットから得た情報しか持っていなかった。しかし、それは十分な知識ではなかったことに気づかされた。研修を通して、多くのことを見聞きし、学び、考えた。そして、その恐ろしいと思っていた核兵器は、自分たちの過ごしてきた日常を奪ってしまう、想像以上に恐ろしいものである、絶対に使用してはいけないものである、と改めて感じた。

世界各地で未だに戦争や紛争が起こっている。私は、被爆地の長崎で学んだことを家族、友人や原爆のことを詳しく知らない人たちへ伝えていきたい。日本や世界に向けて戦争の恐ろしさや命の大切さをどうにかして、伝えていきたい。そして、当たり前のように世界中から戦争や核兵器がなくなってほしい。

平和な世界へ



郡山市立明健中学校2年 鈴木康平

1 派遣研修への参加に当たって

今回、長崎派遣研修に参加しようと思った理由は、戦争とはどのようなものなのか、広島に続いて投下され、太平洋戦争を終結させることになった原爆とはどのようなものなのか、惨劇に見舞われた長崎がどのように復活したのか、について深く知りたいと思ったからだ。太平洋戦争といえば、真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦、沖縄戦、日本各地の空襲と並んで広島、長崎への原爆投下が行われたことは聞いていた。しかし、戦争、原爆によって人々が受けた苦しみ、復興における苦難を想像することはできずにいた。真に戦争、原爆について考えることがなかったと思う。原爆が長崎の人や町にどのような影響を及ぼしたのかを深く知ることで、平和に対する思いを確かなものにできる良い機会だと考えた。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

ここには、原爆投下直後の長崎の町や人々の様子などが分かる資料や写真、物などが展示されていた。原爆投下の際に発生する熱線によりひどい熱傷を負い、皮膚が焼けただれている人の写真や、爆心地の近くにあって炭のように真っ黒になった弁当箱に大きな衝撃を受けると同時にとても悲しい気持ちになった。また、長崎に落とされたファットマンの模型もあった。構造についての詳しい説明がついており、優れた科学技術はこのような悲惨な状況も引き起こすのだという考えが浮かび、とても恐ろしくなった。その他、後遺症で苦しむ人々の様子についても詳しく説明されており、二度と核兵器を使用してはいけない、さらに、世界か

ら核兵器を無くさなければならぬと改めて強く思った。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは2日間にわたって行われた。1日目は被爆体験講話と「こぢんまりフィールドワーク」。被爆体験講話では、被爆された方から原爆が投下された当時の様子を直接聞くことができた。「こぢんまりフィールドワーク」では、爆弾を落とされたときの対処法や、平和公園周辺の特に関心のある場所に行き丁寧な説明を受けた。この日の学習を通し、原爆資料館で得た思いを深めることができた。

2日目は、出島メッセ長崎での意見交換会。お題があり、各自意見を出し合い、話し合っ解決を導くというものだった。さまざまな意見が飛び交うと同時に、納得させられるものが多く、大変刺激的で有意義な時間であった。

(3) 平和祈念式典

毎年テレビで目にしてきたこの式典に出席できた。様々な国から多くの人々が出席していた。世界中の人々がこの式典を重んじ、平和を祈っているということを感じた。式の中で、献花とともに献水という儀式が行われた。被爆時に水を求めた方々が多くおり、欲した水を飲み、または飲めずに亡くなられたとのことである。大変辛い気持ちになった。長崎平和宣言や平和への誓いが読まれ、合唱などもあり、とても感動的な式典であった。世界を見渡すと各地で戦争が行われており、核兵器使用の危機も高まっている。私たちは世界から戦争をなくさなければいけないと改めて思った。



< 祈り >

3 心に残ったこと

原爆資料館には、原爆投下直後の長崎の町の様子や被爆した人々の写真パネル、爆心地にありながらも消滅せず現在に残った物、投下された爆弾・ファットマンの模型などが展示されていた。1945年8月9日に何が起きたのか、に関する詳しい説明を見聞きしながら、それらの展示物を目の当たりにした時、戦争、原爆投下の恐ろしさ、悲惨さを今までにない強さで感じた。今まで経験してきた「当たり前」の世界とは全く異質な世界を実感した衝撃的な体験だった。実際にその場に居合わせたとしたら、まず、何が起こったのか、何が起きているのか、全く理解できないだろうと思う。体中の痛み、喉の渇き、溶けてしまった自分の体の様子に耐えられず、絶望してしまうかもしれない。人々は何を感じ、考えたのか。想像を絶する世界がそこにあったのだと思う。

しかし、長崎は復活した。資料館を見学した後の私には、奇跡のように思えた。長崎復興の様子についても様々な展示、解説があったのだが、あの地獄のような世界から、どうして復活できたのか、まだ納得できていない。上の写真は、展示の最終エリアの様子である。美しいオブジェが印象的で、被爆した方々の苦しみ、悲しみを想像させた。また、なぜか1日目の夜に展望台から見て感激した長崎の夜景が思い出された。

4 派遣研修に参加して感じたこと

「長崎を最後の被爆地に」この考えを世界に伝えていくこと、そして、それを実現し続けることが大切であると考えた。

朝、何事もなく起きて、食事をし、登校し、勉強、部活を頑張る。休み時間には友人たちと会話を楽しむ。今までの私には「当たり前」の生活であった。しかし、戦争が起これば、簡単に消えてしまう生活なのだ。このことを世界に伝えていくこと、また、次の世代にも伝えていくことが大切であり、私たちの使命であると思う。

今回の派遣研修において、郡山市内の私と同じ中学2年生の仲間たちと出会い、何気ない会話や議論を通して、皆の知識の豊富さ、迫力のある考え方に驚かされた。他の人々と意見を交換し、自分の考えを広げ、深めていくことの素晴らしさを実感した。平和を実現することは難しいのかもしれないが、人々が対話を繰り返し、協力することで希望が見えてくるのではないかと思った。

原爆とはどのようなものなのか、長崎はどのように復活したのか、について深く知りたいと思い、参加した今回の長崎派遣研修であったが、大きな成果を得ることができたと思う。人々の持つ苦しみや悲しみに常に寄り添える自分でありたい。世界の現実について常に関心を持ち、他の人々と協力できる自分でありたいと思った。この研修に参加できて本当に良かった。

まずは自分から



郡山市立安積中学校2年 森 紗 那

1 派遣研修への参加に当たって

私は小学校の社会の授業で、初めて「戦争」について知った。戦争とは、恐ろしくて、一瞬にして人が亡くなってしまうこと。そのような知識しかもっていなかった。戦争を学んでから、私の誕生日が「広島平和記念日」だということを知った。調べてみると、広島は原爆を投下され、たくさんの犠牲者が出たということが分かった。そして、長崎にも原爆が投下されたという事実を知った。そのとき、私は自分が思っていたより、戦争について知らないということを実感した。戦争の恐ろしさを肌で感じ、自分の目と耳で戦争とは何か、過去には何があったのかをより詳しく学びたい。そう思い、この研修に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 被爆体験講話

「みんなで死のう。みんな一緒よ！」この言葉を8歳のときに聞いた八幡照子さん。戦時中、外に出た八幡さんを強い光が襲った。顔を覆い意識をなくす。そのとき、強い爆風によって5、6メートルも吹き飛んでいたそう。起きると、頭ががんと痛み、あたりにはもうもうとした土煙があがっていた。お母さんが狂ったように家族を探し、みんなを布団でくるんだ。家族みんなで肩寄せ合ったとき、八幡さんは家族の絆を感じたそう。避難所の学校に行くと、運動場では人を焼く異臭がした。「それを見て怖いと感じなかった」と八幡さんは語る。今でも、強烈な熱線や放射線をあびた人々はみんな亡くなったり、障害を負ったりする。それによって差別を受けたりする。そんな中でも、世界のたくさんの人々に核兵器廃絶を訴え、平和を願う

八幡さんに感銘を受けた。

(2) 永井隆記念館

永井博士は、放射線医学の道に進んだ方だった。しかし、白血病を患い余命3年と診断される。永井博士は自らが原爆で重傷を負いながらも、負傷者の救護活動にあたった。そして、晷2枚ほどの如己堂で寝たきりの生活を送る。それでも、人類への愛と平和について17冊の本を書いた。医学の科学者として、2人の子どもの親として、そして被爆者として。

私は、原爆によって家族や友人をなくした方々のために、勇気や希望を与えてくれた永井博士のおかげで今の平和があるのだと思った。

(3) 青少年ピースフォーラム

ここでは、高校生の青少年ピースボランティアのみなさんが私たちに過去の長崎の戦争を詳しく教えてくださった。その中でも、戦時下の生活を疑似体験する学習が記憶に残った。まず、付箋に自分の大事な人やものを書いた。お母さん、お父さん、弟、家、安心して眠れる場所…書いたあと、周りが暗くなり実際に空襲警報が鳴り響いた。耳をふさぎ、目を覆い、低い姿勢をとる。静かになり目を開けると、徴兵制度が出された。12歳以上の男性の付箋を持っている人は、手放さなければいけない。このように、少しずつ自分の持っている付箋がなくなっていく。私は、空襲警報が鳴り終わった後がとても怖くなった。目を開けると自分から何かが消えてしまう。戦時中には人々に平和がなく、毎日が恐怖だったということを知ることができた。



< 平和祈念像 >

3 心に残ったこと

この派遣学習で1番記憶に残っているのは、「平和祈念像」である。平和祈念像は、誰かの真似をして作ったのではなく、仏を表しているということを教えてもらった。そして、ポーズにも意味があった。天を指した右手は「原爆の脅威」を、水平に伸ばした左手は「平和」を、上げた右足は「原爆前の静けさ」を、踏み出している左足は「原爆後に立ち上がろうとする気持ち」を表しているのである。まぶたを閉じているのは、黙とうを表しているためである。

社会の教科書で見たことがあるというだけで深く考えたことがなかったため、ポーズの一つひとつに意味があることに驚いた。深く考えて作られていることを知った今、作った方々が平和な日々を強く願って作ったのではないかと考えた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

「戦争」。それは私たちにとって、遠い存在である。心の奥でそう思っている自分がいた。しかし、この研修を通して決してそんなことはないと思えるようになった。今でも戦争をしている国がある。今、実際に戦争を体験した被爆者の方々の平均年齢は、85.58歳。年々、戦争の恐怖を知る方が減っていつているのが現実である。世界には実際に、核兵器を作っている国があり、その威力は長崎や広島に落とされたものとは比べ物にならないくらいに大きくなっている。このような事実を学んだ私たちが長崎を最後の被爆地にするためにできること。それは、友達や家族、未来を担う子どもたちに、平和の尊さや核兵器の恐ろしさを伝えることである。小さな力でも合わせれば大きな力になる、そう信じて、私はみんなに平和を訴え続けたい。

過去から学び未来へつなぐ



郡山市立安積第二中学校 2年 伊 東 郁 陽

1 派遣研修への参加に当たって

世界では、大きさは違えど誰かが傷ついている。転んでしまった、友達とぶつかっただけならまだいいだろう。だが、戦時中は、原爆により一度に多くの命が奪われた。

今でも、世界のどこかで、戦争や紛争が起こっている。私は、これまで戦争など詳しく調べようと思ったことが少なかった。今の日本が、どんな過去を乗り越えて今の平和を創り上げたのか。それを知り、平和について改めて考えたいと思い参加を希望した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

永井隆さんは、自分も頭部に重傷を負いながらも、患者さんや被爆者の治療を最優先にしていた。白血病で倒れてからも多くの本を残した方だ。そんな、永井隆記念館で私は、特に妻のみどりさんがつけていた「ロザリオ」と言われるアクセサリが残っていたことが心に残った。

永井隆さんが自身の家に戻れたのは、原爆投下から3日後のことだ。妻は、骨になっていたが、「ロザリオ」が残っていたのは、本当に良かったと思う。例えば、自分の家族が原爆によって亡くなっていたとしたら、瓦礫の下には誰かも分からない遺骨があるだろう。誰なのか分からないままずっと生きていくのは嫌だと私は思う。だが、いつも持ち歩いていたものが近くにあったら、誰か分かるだろう。どちらにしても家族が亡くなってしまうのは、悲しいことだ。私は、「ロザリオ」を見て改めて、原爆とは、一瞬で命を奪うものだと実感した。

(2) 原爆資料館

戦時中、誰かが使っていたであろうものが溶

けてしまっていたり、焦げてしまったりしたものが多く展示されていた。初めて見たとき、私は、本当に現実发生过っていたのか、こんなに多くの建物や木々、人々が被害を受けたのか、まったく信じられなかった。だが、一つひとつの展示物を見ていくにつれ現実に起こったことなのだと胸が痛んだ。

その中でも私が特に衝撃を受けた展示物がある。それは、原爆の落とされた瞬間をこと細かに描いた巻物だ。これは、被爆者が原爆の恐ろしさを後世に伝えようと描いたものだ。巻物は、実際に見ることもできたが、タブレット端末を使って動かしてみることもできた。そのため、約20メートルある巻物の、展示されていない部分も見ることができた。巻物には、原爆を落とした飛行機や被爆者が描かれていて、見ているととても心が痛んだ。当時を知ることで変えることのできる未来があるかも知れないと思った。

(3) 平和祈念式典

平和祈念式典は、長崎に原爆が落とされた8月9日に毎年行われている。式典では、原爆死没者奉安、献水、献花を行った後、長崎市長による平和宣言や来賓挨拶があり、合唱が行われた。

私は、特に合唱が心に残った。曲名は「あの子」という。歌詞には、子どもが亡くなってしまったことが分かるフレーズが多い。原爆では、今年分かった人を加えると約20万人の方が亡くなっている。その中には、赤ちゃんもいただろうし、お年寄りもいただろう。

原爆は、たくさんの命を無差別に奪ってしまうものだと合唱を聞いて改めて思った。



＜ 原爆を耐え抜いた木 ＞

3 心に残ったこと

原爆で亡くなった方は、風圧、熱線、放射線の3つが主な原因になっている。上の写真は、その1つの風圧から耐え抜いた木だ。実際場所からは、少し離れているが風圧から耐えたのは本当だ。当時この木は、城山小学校にあった。城山小学校は、原爆の投下された場所から500メートル離れた場所にあり、500メートルの山の上に建っていた。原爆の風圧や熱風を大きく受けている。そのため、城山小学校は、半壊し、裏の林のほとんどが吹き飛んでしまった。だが、どうにか耐えた木もあった。そのうちの1本だ。いつも高く堂々としている木ですらも倒してしまうのだから、原爆は、本当に怖いものだと改めて思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

長崎派遣の事前学習で、原爆により、止まった時計や溶けた鉄を見て、とてつもない威力だったのだろうと思っていた。だが、実際に長崎の被爆したものを見ると自分の予想をさらに上回る威力だったのだと分かった。煉瓦で造られた建物も一部が残ったものの半分以上壊れ、立派に育った木ですらもなぎ倒されてしまった。そして熱風や放射線などが及ぼした被害は、約12キロメートルであることに驚いた。

今の原爆は、当時よりも性能が上がっているため、再び戦争になってしまうと、被害はさらに大きな範囲になり、多くの人々が苦しむことになる。そんなことが今後起こらないようにしていかなければならないと、この長崎派遣の研修で学んだ。

「平和」のもとに歩む 私たち



郡山市立三穂田中学校2年 野田 采里

1 派遣研修への参加に当たって

私は戦争を知らない。しかし、世界では争いにより多くの命が奪われている。そして、日本は唯一の被爆国である。この事実は知っている。

現在、ウクライナやガザなどでの紛争により、多くの人々が苦しんでいる。遠くで起こっていることとしか認識していない。原爆が落とされたとき、そして今もなお原爆症などで苦しんでいる長崎の人々。どれだけ苦しい思いをしているのか、分からないままだ。

そのような私が軽々しく「平和」という言葉を口にして良いのだろうか、との思いから、当時長崎で起こったことや長崎の現状に直に接し、周りの人や自分自身と深く対話することで、本当の「平和」の意味が見つかるのではないかと考え、この長崎派遣に参加しようと決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

原爆資料館には、長崎が原爆によりどのような被害を受けたのか分かる物が多くあった。中でも印象に残っているのは、11時2分を指したまま止まっている時計だ。原爆が落とされたこの時間にどれほどの人や動物が辛い経験をしたのだろうか。考えただけで、悲しい気持ちになった。

他には、「きのこ雲」が空を覆うようにもくもくと上へ向かっている映像も印象に残っている。この雲をどのような気持ちで見上げていたのだろうか。命を奪う雲。周りから見ると残酷さは感じないが、下にいた人々の恐怖は計り知れないものだったと感じた。

原爆資料館で様々な資料を見ていくうちに、原爆の恐怖を実感し、改めて戦争の悲惨さ、理

不尽さを再確認することができた。

(2) 平和祈念式典

平和祈念式典では別会場ではあったが、式典の様子をスクリーンで見っていた。長崎市長の核兵器廃絶と世界の平和を実現するために、弛まぬ努力を続けていくという平和宣言を聴き、私たち若者の力が大切であると感じた。

核兵器のない世界を創造するために、私たちが語り継いでいかなければならないと思う。核兵器に頼る世界はやめよう。命を奪う争いはやめよう。この言葉を言い続けることが私たち若者の使命であると考えた。

(3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは、長崎のピースボランティアの方々、全国から集った学生の方々と一緒に平和について学ぶというものだった。

被爆者である松尾幸子さんの話を聴いた。当時は自分のことで精いっぱいであり、姉が亡くなったことに対して、涙を流すこともできなかった。この話を聴き、身近な家族が亡くなったのに泣くこともできない状況は、私には想像できなかった。自分の感情を表に出すことができない。ありえない話であると感じた。しかし、実際にあった話である。このような体験をした松尾さんの言葉だからこそ、私は絶対に核兵器を廃絶しなければならないと心に誓った。



＜ 柱時計 ＞

3 心に残ったこと

上の写真は、原爆が落とされた11時2分で時が止まってしまった時計である。その後、時を刻むことができないうまま、79年の歳月が経過している。この79年間をどのようにこの時計は見てきたのだろうか。長崎の復興。そして、現在の世界の様子。

人々には、思いもよらないほどの力がある。原爆により跡形もなく焼けてしまった長崎を、美しい長崎に戻したこと。私たちには、元に戻す力だけでなく、後世に伝えるという力もある。だから、この長崎での出来事をこれからも伝え続けなければならない。この柱時計の想いを受けて。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回、長崎派遣に参加して長崎の今を目にすることができた。かつて、原爆が落とされたとは思えないほど、自然に囲まれていることに驚きを隠せなかった。残酷な原爆。この現実から立ち上がる原動力は、自分たちが愛した長崎を元に戻すという強い気持ちだったのではないかと考えた。人の想い。それは途轍もないほど大きな力を持つことを今回知ることができた。そして、「平和」とは、何ものにも脅かされることなく過ごすことができること。このことは、理不尽に命を脅かされているこの瞬間で一番難しいこと。私は長崎でこのように考えた。この世の中を「平和」に導くために私ができることは、戦争や核兵器の悲惨さ、理不尽さを人々へ伝えること。そして、この想いを私だけでなく、もっと多くの人へ繋げていくことだ。この長崎の地で、戦争や核兵器の恐ろしさを目の当たりにしたからこそ、伝えることの大切さを実感した。二度と同じことを繰り返さないために。

私達で作る平和



郡山市立逢瀬中学校2年 石井航瑠

1 派遣研修への参加に当たって

私はこの研修に参加するまでは平和や核兵器についてあまり興味が無かった。参加する前の印象は長崎の原爆の被害より、広島の方の方が大きいと思っていた。派遣研修に参加しようと思った動機はこの研修を通して自分自身を成長させたいと思ったからだ。研修に向けて考えたことがある。それは平和についてだ。自分にとって平和とは人々が笑って暮らせる世の中だと考えた。しかし今の世の中は戦争が起き人々は笑って暮らせていない。何故だろうと考えた時に核兵器の保有だと思った。核兵器保有数は、2024年1月時点で全世界に1万2,121発（シプリ年鑑より）もあるのだ。これを調べて私は平和な世の中にするためには、先が長いと感じた。核兵器を保有している国は平和な世の中にしたくないのかと思った。1日でも早く平和な世の中にある理由を見つけられることができると思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 平和祈念式典

私は式典に参列出来なかったので出島メッセ長崎という会場で平和祈念式典を見た。献花台が設けられており原爆で亡くなった方々に献花をした。平和祈念式典では水を欲しがっていた被爆者のための献水や長崎市長による長崎平和宣言などが行われた。特に印象に残っているのは、長崎平和宣言だ。長崎平和宣言では、被爆者であり詩人でもある福田須磨子さんが綴った詩が読まれた。その詩を聴き私は共感した。福田さんの詩の最後には、平和を呼びかける事が書いてあった。長崎平和宣言の最後には、「平和をつくる人々よ！一人ひとりでは微力であって

も、無力ではありません。」と言っていた。これを聞いて私達が呼びかければ平和な世の中に近づいていけると思った。

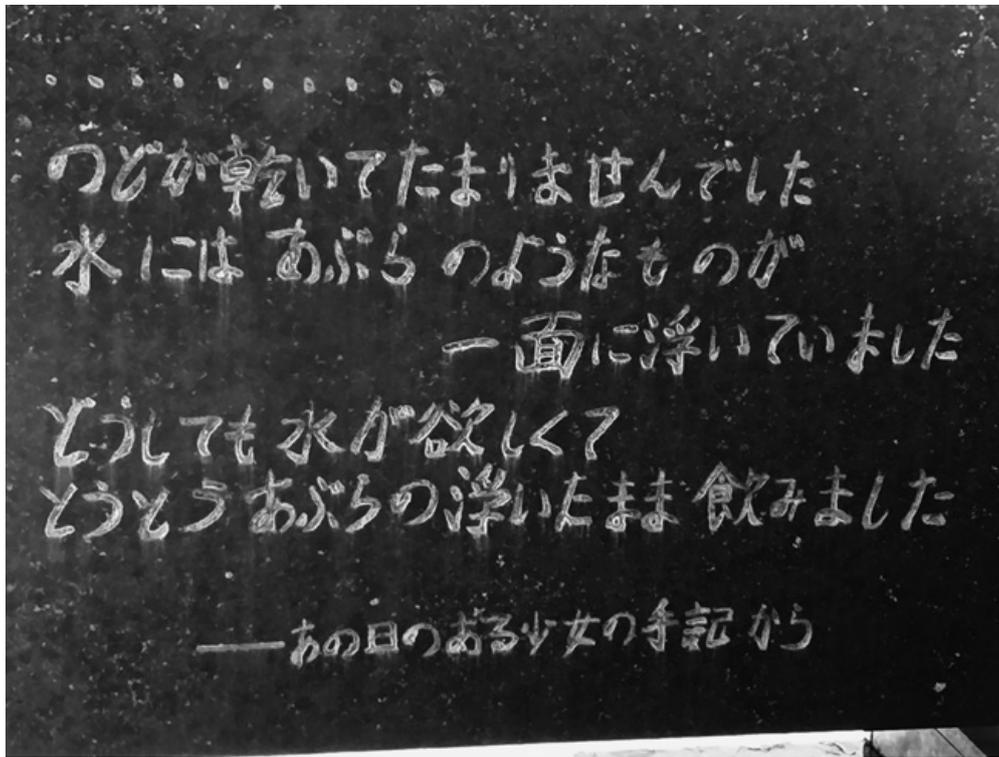
(2) 原爆資料館

館内に入ると11時2分で止まった時計が目に入った。それを見ると原爆の威力が伝わってくる。少し進むと原爆が投下されたあとの浦上天主堂があった。これを見て、たった一つの原子爆弾で建物がこんなに破壊されると分かった。

さらに進むとファットマンの模型があった。初めて見たが想像以上に大きかった。奥に進むと原爆の威力を表す物があった。黒くなった弁当箱や頭蓋骨が付着した鉄かぶなどがあった。原子爆弾の威力が伝わってくる。実際に見て胸が締め付けられ、言葉が出なかった。最後の方は、現代の核兵器が説明されており、長崎に落とされた原子爆弾よりさらに威力が強くなっていると説明があった。見学をしてみて平和な世界にしたいという思いがこみ上がってきた。

(3) 青少年ピースフォーラム

8月8日、9日の2日間で行われた。全国の平和使節団の青少年と長崎の青少年が交流を深めた。1日目には被爆者の話を聴き、原爆の威力を資料で見るとより詳しく知ることができた。2日目の意見交換では戦争が起きる理由について意見を交換した。自分なりに色々考えてみた。自分の班では色々な目線での意見が出てきた。武器を持っているからだとか領土が欲しいからだなどの意見が出た。全国の人達との意見の交換は、考えが違った意見を聞くことができ貴重な経験となった。この2日間は自分にとって良い経験になった。



<少女の日記>

3 心に残ったこと

心に残ったことは、平和公園内にある少女の日記の石碑だ。「のどが乾いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてどうとうあぶらの浮いたまま飲みました」この少女はあぶらが浮いた水なんて飲みたくなかっただろう。綺麗な水を少女は探し回ったと思う。少女だけではない、水が欲しかった人は大勢いると思う。この石碑をみて、私たちが当たり前綺麗な水を飲んでいることが当たり前ではないと感じた。この写真を選んだ理由は、見た時に衝撃を受けたからだ。この石碑の前には少女のように水を欲しがった人の為の平和の泉がある。この泉の水は綺麗だった。この泉を見ていると、水が欲しくても飲めずに亡くなった人達が飲みたかった水だと思った。改めて水の大切さが分かった。原爆は水も飲めなくなってしまう恐ろしい兵器だと分かった。この泉を前にしてこの綺麗な水を二度とあぶらの浮いた水にしたいと思った。また、平和は自分達で作るしかないと思った。日本はかつて綺麗な水が飲めない時があったと初めて知り、このような被害が全世界で起きて欲しくないと思い、長崎を最後の被爆地にすると心に誓った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の派遣研修に参加して、特に印象に残ったことは、被爆者の実際の話を知ったことだ。理由は原爆の威力を分かりやすく知ったからだ。また、考えさせられたことは、平和な世の中にするためには、伝えていくことが大事だということだ。私は、派遣研修を通して学んだことをこれからの生活をする上で大切な部活動や勉強に生かしていきたい。また、友達には、原爆が落とされた時の長崎の被害や核兵器の恐ろしさを伝えていきたい。私が思うこれからの人類の課題は、全世界から核兵器を失くすことだ。理由は核兵器を1回でも使ってしまったら、全世界で核戦争が起きる可能性があるかもしれないからだ。私は、平和とは笑って暮らせる世の中だと思っていた。しかし、今回の研修に参加したことで、平和とは他人が作るのではなく自分達で作っていくものだという考えが変わった。そして、その世の中を作っていくには、派遣研修で学んだことや分かったことを伝えていく必要があると思った。長崎派遣に参加して自分自身を成長することができ、自分の考えや平和に対する考えも変わり、とても良い体験になった。

平和のために…



郡山市立片平中学校 2年 佐藤 瞳

1 派遣研修への参加に当たって

1945年の8月6日と8月9日に日本に2つの原子爆弾が投下された。そのうちの1つが長崎だ。

こういった恐ろしく残酷なことを繰り返さないために、被爆者の方などたくさんの方が核兵器について知ってもらおうと努力している。しかし、世界では今もなお戦争が続いている。また、若者の戦争への意識が低下しつつある。

私は、今回の研修を通して、たくさんの人に核兵器の恐ろしさと呼びかけ、二度と戦争などが起きないように戦争への意識を高めてもらうために、派遣研修への参加を決めた。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎原爆資料館

2日目に長崎原爆資料館に行った。館内では、原爆投下前と投下後の長崎市を比較した写真や、原爆投下時刻である11時2分の時計などが展示されていた。

1番心に残ったのが「焼き場に立つ少年」という米従軍が撮影した写真だ。私たちよりも若い1人の少年が原爆の被害によって亡くなった弟の死体を背負いながらその弟の火葬のために列に並んで待っている。その1人の少年は泣くのを我慢するために唇を噛み締めて血が出ている。その姿を見て、私は胸が苦しくなった。

また、館内で被爆者の方が体験談を話されていた。その話を真剣に聴いている人や原爆資料をしっかりと目に焼き付けている海外からの観光客もいた。私は、国籍や年齢など関係なく真剣に見学している人がたくさんいて嬉しかった。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは8月8日と9日の2日間で開催された。

1日目は戦争の疑似体験をした。空襲から身を守るための体勢をとったり、3種類のカードに「大切な物」「大切な人」「大切な場所」を書いたりした。空襲警報が鳴るたびに、カードに書いたお気に入りの公園や学校などが無くなったり、家族が亡くなったりし、最終的に1人になってしまうという疑似体験だった。この体験で当時の人々の大変さと身近にいる人や物の大切さを実感することができた。

2日目には、争いや争いの原因が起こらないためにどうするかを班ごとに考えた。付箋に意見を書き、交換し合った。その後色紙に自分がどうするかを書いた。今回のピースフォーラムで、他県の派遣生と交流したことは貴重な体験になった。

(3) 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

8月9日に長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が行われた。今年で、長崎は被爆して79年を迎えた。岸田内閣総理大臣をはじめ、海外からの来賓もたくさん参列していた。

11時2分に1分間の黙とうが捧げられ、会場が一瞬で静まりかえった。その後、長崎市長による「長崎平和宣言」や被爆者代表による「平和への誓い」、児童合唱、全てに大きな拍手があった。

その後、被爆50周年記念歌の「千羽鶴」の合唱が行われ、平和を意味する鳩が一斉に飛んでいった瞬間、私はとても感動した。私は、原爆死没者が19万8,785人と聞き、改めて原子爆弾の威力の大きさに驚いた。もうこれ以上、犠牲者が出ないことを祈っている。



< たくさんの犠牲者を出した爆弾 >

3 心に残ったこと

一番心に残ったのは8月9日に長崎に投下された原子爆弾のレプリカだ。この原子爆弾は、その容姿から「ファットマン」と呼ばれた。直径1.52メートル全長3.52メートル、重さ4.5トンのプルトニウムを用いた原子爆弾である。「ファットマン」は広島に投下された「リトルボーイ」より強力で、爆風による被害も広島より大きかったらしい。落下中心地付近の熱線は約3,000度～4,000度の高温だったそうだ。私はこの温度を聞いた時、どのくらいの温度なのだろうと想像もつかなかった。太陽の表面温度が約6,000度で、鉄が溶ける温度が約1,500度ほどであるので、原子爆弾からかなりの高温の熱線が放出されたと考えられる。私はこのたった一発の爆弾が投下されたことによって、たくさんの人の命が一瞬で奪われ、長崎市の街を吹き飛ばしたことに背筋が凍った。投下直後の人々の焼けた肌や溶けた目玉など想像するだけで鳥肌が立った。

もうこのような恐ろしいことは二度と起こらないでほしい。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は、派遣研修の参加前と参加後で原子爆弾の捉え方が変わった。参加前はもちろん原子爆弾は恐ろしく、あってはならない存在だった。しかし、自分の住んでいる福島県に投下されたわけではないから、あまり関係ないだろうと思っていたのだが、参加後、世界で唯一の被爆国である日本人として、原子爆弾の問題に関わるのは当然のことと考えるようになった。原子爆弾は、投下された長崎、広島だけの問題ではなく日本全体、そして世界全体の問題でもある。このことに気づくことができたのは、研修による貴重な体験のおかげだ。改めてこの研修によって「平和」とは何か、そして平和が当たり前ではないことに気づくことができた。私は、この平和な時代を継続するために、また、さらに平和にするために今回学んだことを生かして、みんなに呼びかけていきたい。私は派遣研修で体験し学んだことは決して忘れない。私は、この派遣研修に参加できて本当によかったと思う。

平和を守るために



郡山市立喜久田中学校 2年 本 田 輝

1 派遣研修への参加に当たって

平和……。僕は当たり前のことだと思い、馴染みがなかった。でも、その考えは間違っていたのだと、気付かされた。今も、どこかで起きている「戦争」。ニュースで流れるガザ地区の悲惨な光景をテレビ越しに見て、僕は、それを深く知り、よく分かったうえで伝えようと思った。

長崎に原爆が投下されたこと、その原爆で多くの人が亡くなったことしか分らなかった僕は、原爆や平和について多くのことを学ぶチャンスだと思い、派遣事業への参加を希望した。

2 派遣研修に参加して

(1) 青少年ピースフォーラム

平和会館で行われた青少年ピースフォーラム 1日目では、松尾幸子さんの被爆体験講話を聴いた。当時 11 歳だった松尾さんは、被爆地から 1.3km のところで被爆。幸い、松尾さんは無傷で無事。だが家は全焼、家族も失った。そんな松尾さんのような人がたくさんいると思うとゾッとした。この講話を聴き、核兵器の廃絶、平和の尊さを改めて実感した。

その次に、戦争や原爆投下時の疑似体験をした。一人ずつ 15 枚のカードが配られ、それぞれ大切な物を書いた。そして疑似体験が始まる。大きな音とともに激しい光が目を襲った。戦争が進み、気付けば、カードは無かった。原爆のせいで大切な物が全て無くなったのだ。これを機に「核兵器の廃絶」についての想いが深まった。また、「戦争なんて絶対に起こしてはいけない」と思った。

(2) 永井隆記念館

白血病……。永井隆博士を襲った病気。原爆投下の 2ヶ月前、白血病と診断され、余命 3 年と言われた。そして、被爆。寝たきり状態でも 17 冊の本を書き、平和を訴えた。

永井隆博士の生涯を聴いたり、見たりして、平和を願う諦めない心を永井博士は持っていたと感じた。43 歳という若さで亡くなったが、平和を願う想いは永遠だと思った。

(3) 長崎平和公園

平和公園を訪れると平和祈念像があった。瞑っている目は「被爆者に対しての冥福」。上を指差している右手は「原爆」。左手は「平和」という意味が込められ、昭和 30 年に建造された像である。

また、公園内にほとんど壊れた刑務所があった。跡形もなく壊れていたその場所を見て、原爆の破壊力を改めて感じた。



<トーマス・ブレイク・グラバー像>

3 心に残ったこと

心に残ったこと。僕の中では山ほどあるが、その中でも「グラバー園」が心に残った。上の写真は、冒険商人「トーマス・ブレイク・グラバー」の像だ。この人は、日本近代化に大きな影響を与えたそうだ。旧グラバー住宅、旧リンガー住宅、旧オルト住宅は居留地時代に建設され、「国指定重要文化財」に、指定されている。また、旧グラバー住宅は、「明治日本の産業革命遺産」の構成資産に登録されている。しかもここは、原爆の被害が深刻ではなかった。爆心地から離れていて、川や山で守られたからだ。でも、長崎全体はそうではなかった。焼け焦げた町… 1945年8月9日に長崎で起こった事を絶対に忘れてはいけないと強く思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

僕は、この4日間を通して戦争の悲惨さ、平和の尊さ、原爆、核のことなど色々な事を詳しく学んだ。また、新たな友達と共に楽しく、そして真剣に学び、積極性、協力性、コミュニケーション力を向上させることが出来たと実感した。

僕達は「ナガサキ」のことについて、現地の人々に多く教わった。次は僕達の番だ。この貴重な経験を活かし、より多くの人に伝え、知らせないといけないのだ。

「戦争」を起さないために……。

「平和」を守るために……。

原爆のおそろしさ



郡山市立熱海中学校2年 後藤月奈

1 派遣研修への参加に当たって

原爆については、長崎と広島との2つの場所に落とされたこと以外全然知らなかった。授業で何回か原爆について習ったことがあり、1度は長崎や広島に行ってみたいと思っていた。そのような時に、毎年2年生が長崎に行く「長崎派遣」があることを知って、ぜひ参加したいと思った。

以前から気になっていた長崎に行き、原爆の恐ろしさや原爆が落ちた後、人々がどんな生活していたのかなどを理解するいい機会だと思い、この派遣研修に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 少年ピースフォーラム

少年ピースフォーラムは、8月8日、8月9日の2日間行われた。色々な都道府県から小中高生が集まって、平和や、戦争・ケンカが起こる原因などについて学んだり、考えたりするものだった。

1日目は、まず被爆者による実際の体験談を聞いた。当時は、いつ爆弾が落とされるのか分からない様な生活をしていたことがわかった。

次にAコースとBコースに分かれた。私はAコースだった。Aコースは、まず「こぢんまりフィールドワーク」という原爆に関する場所をまわるものだった。平和祈念公園などをまわって、爆風で壊れた建物などを見学した。その後は原爆の疑似体験をした。渡されたメモに私にとって大切なものを書くのだが、原爆の被害を受けるにしたがい、どんどん大切なものを書いたメモが消失していった。私はメモだけだったが、次々に大切な友達や物、場所が無くなることを考えると、どんなにつらかったのだ

ろうと推察できた。

その夜は、交流会があった。他県の人々と夕食をとりながら、さまざまな話をした。

2日目は、知り合った人たちと、ケンカはどうしておこるのか、ケンカはどうしたら無くなるかを考えた。面白い考えや斬新な考えなど、自分にはない考えがあり、とても学ぶことが多くあった。昨年の先輩たちは、台風の影響で2日目は中止になったので、私たちは2日間研修を受けることができ、様々な人たちととても充実した時間を共有できて良かった。

(2) 原爆資料館

原爆資料館は、爆撃を受けた街の写真や被害を受け形が変わってしまった物などが展示してあった。当時のものを見学すると、当時の人々の恐怖が想像できて恐怖心でいっぱいだった。原爆の爆撃が一瞬にしてあたりを焼き尽くしたことが理解できた。核兵器をそのまま残しておくことは非常に危険であることが、展示品などを見て実感できた。



< 心の支えになったマリア像 >

3 心に残ったこと

特に心に残ったのは青少年ピースフォーラムだ。まず、原爆の疑似体験をした。メモに自分が大切なものや場所を書き、ナレーターの方に「当時は、人手が不足していて16歳から60歳までの男の人は戦争に駆り出されました。それではあなたの大切なことを書いた人は、役員にメモを渡してください」などと言われ、どんどん大切な人やもの、場所をかいたメモがなくなっていく体験をした。私はメモだけだったが、被爆者の方々は、大切な物などが一瞬にして無くなり、さらに生活の自由が奪われてしまい、今では想像を超えることが起きていたことがわかった。

今では当たり前、何不自由なく暮らすことができているが、その当時の方々は、生まれた時から国のために働き、命を捧げていたことに衝撃を受けた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は、この研修に参加する前に思っていたよりも、原爆は恐ろしいものであり、あってはいけないものであるということを実感することができた。原爆により、火傷した人や建物の下敷きになった人がおり、ものすごい勢いの爆風で建造物の形を変えたりするなど、一瞬にして住んでいる環境が変化してしまったことに驚いた。

見聞きした長崎の悲惨さに驚きと恐怖心でいっぱいだったが、広島原爆に比べると、被害は小さかったと聞いて、さらに驚いた。人が作った兵器により、たくさんの人々の命を奪うことになったことを、もう繰り返しては行けないと強く思った。

私達世代が、核兵器をなくし、長崎を最後の被爆地にしなければならないと思った。

長崎の想い



郡山市立守山中学校2年 佐藤心乃

1 派遣研修への参加に当たって

「戦争は遠い存在のもの。
平和は当たり前にあるもの。」

その考えを覆したのは小学校のときに読んだ「はだしのゲン」だ。この本を読んで、今の日常が当たり前ではないこと、そして戦争は身近なものであると知り、とても怖くなったことを覚えている。「この現実から目をそらし続けているは本当の平和は訪れない。79年前の日本に何があったのか。そのあと、どうやって復興していったのか。事実を知りたい。」中学生となった今、その思いは強くなり、私は、派遣研修への参加を希望した。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆落下中心地

私が平和公園で一番心に残っているところは、原爆落下中心地である。塔の高さは約6.5mだ。この塔の約500m上空で原爆が炸裂した。私は、その塔の真上の空を見つめてみた。500mってどのくらいだろう、と思った。空はすごくきれいな青で染まっていた。この空に原爆が落とされたなんて、想像も出来なかった。今は平和公園だが、昔は、邸宅が並んでいたという。

「この家にいた人は、全員即死だった。」

私は、これを聞いたとき、言葉が出なくなった。この場所はかさ上げされており、ガラス越しに、79年前の地層を見た。そこには、お皿や、ニッパー、瓦、ガレキ、溶けたガラスなどが埋まっていた。遺骨などもあると言う。私たちと同じように生きていた人が、突然、いなくなる。私だったら、耐えられない。何の罪もない一般人が、このたった一つの爆弾で、無差別に殺さ

れた。それは、どんなに恐ろしいことで、怖いことか。もしも、あなたの大切な人が、そこにいたら…。今、世界には、約12,000発もの原爆がある。これは、人ごとではない。いつ、原爆が使われてもおかしくない。今、私たちは、改めて、核廃絶を訴えなければいけないと強く感じた。

(2) 被爆体験講話

青少年ピースフォーラムの1日目、私たちは、平和会館で当時11歳だった松尾幸子さんから話を聞いた。それは、想像を絶する話だった。幸子さんの家族は、ほとんどお亡くなりになられ、行方不明の方もいらっしゃった。それを聞いたとき、自分の家族だったら…と考えると、すごく怖くなった。幸子さんは、思い出したくないだろう出来事を一生懸命話してくださった。それは、世界が平和になってほしい、二度と私と同じ経験をしてほしくない、という気持ちがあるからだろう。

印象に残ったエピソードがある。

幸子さんたちは、原爆投下後、食べるものがあまりなく、いつもお腹が空いていたらしい。そんな中、母親が醤油おにぎりを作ってくれたことがあった。久しぶりに食べたおにぎりはすごくおいしかったそうだ。でも、食べている最中に母親がこう言った。

「その醤油は死体が浮いていた醤油だよ。」

でも、幸子さんたちはお腹が空いていて、それを聞いても何も思わずおにぎりを食べ続けた。

その事実を知って、私は、悲しくなった。そのときはそれしか食べるものがなかったのだ。なんて残酷な世界だ。今は好きなものを好きなだけ食べることができる。安心して衛生的なも



＜ 当時のキリスト教信者を勇気づけた浦上天主堂の鐘 ＞

のを食べられる今の幸せを痛感した。

(3) 平和祈念式典

平和祈念式典では、平和の大切さを改めて学ぶことができた。長崎市長の平和宣言では、一つひとつの言葉に重みを感じた。被爆者代表の話では、胸が締め付けられるような気持ちになった。私は、色々な方の話を聴きながら、長崎の空と平和祈念像を見た。日本は今、すごく平和だと感じた。なんてきれいな空だろう、と思った。しかし、79年前の8月9日の空は、黒かったと言う。こんなに空がきれいなのは、長崎の人々が復興を頑張ったからだろう、と思った。きれいな青い空を見て願った。「この平和が、世界に広がっていきますように」と。

3 心に残ったこと

私が心に残ったことは、浦上天主堂のことである。この写真は、平和公園から見える浦上天主堂だ。浦上天主堂は、17世紀から19世紀における潜伏キリシタンの中心地だった。

あの日、この中には、2人の神父と24人の信者がいた。しかし、ここから500mほど離れたところに原爆が落とされた。浦上天主堂は無残な姿となり、この中にいた人々は、即死した。この周辺に住む約15,000人の信者のうち約10,000人が死亡したのだ。そのような地獄のような町に鐘が鳴り響いた。この鐘は、「アンジェラスの鐘」という。終戦後、永井博士が

浦上天主堂で見つけた鐘であった。原爆投下後のクリスマスに永井博士が鐘を吊るし、鳴らしたのだ。この鐘を聞いた信者たちは、勇気づけられたのであった。

現在、この鐘を「長崎の鐘」という。私はこの話に心を打たれた。長崎の鐘は、暗い闇の中に光を差してくれた鐘だったのである。この鐘の音を想像しながら、私は話を聴いた。この写真の浦上天主堂は、復元されたもので、今でも被爆した像などが残っている。この像を見て、原爆は恐ろしいと改めて思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

本などでしか触れたことのなかった戦争。でも、今回人生で初めて、被爆地に足を運び、戦争というものに直に触れた。平和というものはどんなにすごいことで尊いことかということ、そして核、戦争をなくさなければいけないと強く感じた。被爆者の平均年齢が85歳を超えた今、被爆者から話を聴くことは、大変貴重な時代となっている。その中でも私たちは、話を聴くことができた。この経験を忘れず、大切に、これからたくさんの人に伝えていきたい。そして私たちから、平和の輪を世界へ広げていきたい。平和で明るい未来は、私たちが作っていく。そんな思いが、派遣研修に参加して、込み上がってきた。「平和とは？」これを生きている間、考え続けたい。

長崎を最後の被爆地に！



郡山市立高瀬中学校2年 仁井田 稜 士

1 派遣研修への参加に当たって

私が、長崎派遣事業に参加したいと思った一番のきっかけは、長崎に原爆が投下されたことは知っていたが詳しくは知らなかったので、原爆について知ることができる良い機会になると思ったからである。また、福島県では福島第一原発の事故がありとても大きな被害があった。だから、長崎では、どのように復興していったのか学びたいとも思ったからである。今回の派遣が決まった後、原爆の被害、世界中で起こっている地域紛争や民族紛争、そしてテロ行為などに関心が高まり、調べる機会が増えていった。なぜ、人間は同じ過ちを繰り返すのか？今回の派遣事業を通して少しでも平和について深く考える機会になればという気持ちで参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 浦上天主堂

浦上天主堂は当時、東洋一の壮大さを誇った天主堂だったが、爆心地から約500mの距離にあったため、原爆の爆風によってほとんどが崩壊し、堂内でも多くの人たちが亡くなったという場所である。

現在の天主堂は、赤煉瓦のとても丈夫そうな建物に復元されており、当時の様子をしのばせる。また、前庭には被爆した当時のまま、聖人像が残っている。さらには、原爆公園には崩壊した当時の天主堂の一部が残されている。これらの展示物を見ると、このように丈夫な煉瓦の建物でも崩壊させてしまうほどの威力が原子爆弾にはあり、人間の愚かな行為によって全てが失われてしまうということを改めて実感した。

(2) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館では、原爆に関する様々なも

のが展示されていた。熱風によって溶けたガラス、長崎に投下された原子爆弾のレプリカ、熱風により全身にやけどを負ってうつろな目をした人々の写真など、目をそらしたくてもそらせられないような展示物が並んでおり、私は言葉を失ってしまった。何気ない日常を送っていた人たちが、一瞬で命を奪われたり、肉親を失ったりする現実を目の当たりにし、戦争というものの悲惨さと愚かさを感じた。また、展示された資料の中に、現在地球上に存在する核弾頭の数は推定1万2,520発あると書かれていた。全体の数としては減っているそうだが、増加している国もあり、まだまだ廃絶にはいかないのが現状である。また、核弾頭の数こそ減ってはいるものの、その威力はどんどん上がってきている。長崎に落とされた原爆の何倍もの威力がある。戦後79年がたった今でも私たちは核と隣り合わせだということを実感した。

(3) 長崎平和式典

8月9日、長崎平和祈念式典に参加した。式典では、原爆死没者の追悼の意を込めた黙祷、現地の学生たちによる合唱などが行われた。

その中で私の心に残ったのは、市長の長崎平和宣言だ。その宣言の中に「地球市民」という言葉があった。地球市民とは、同じ地球に住む一員であることを自覚し、国境や人種を越えて地球上の問題を解決していこうとする人々のことを指す言葉である。「この地球市民が声を上げ、力を合わせれば、私たちが思い描く未来を実現することができる」と市長は言っていた。この地球市民という言葉に対して一人一人が自覚をしていくことが、原子爆弾廃絶への一歩なのではないかと強く感じた。



< 11:02 >

3 心に残ったこと

長崎において、4日間の研修を通して1番心に残っているのは、11時2分で止まったままの時計である。この時計は爆心地から約800m離れた民家から発見されたものだ。

79年前、この11時2分に、原子爆弾が上空約500mから投下され、多くの人たちが亡くなり、多くの建物が崩壊した。

そんな悲惨さを、この時が止まったままの時計のねじれたフレーム、波を打つように曲がった文字盤が物語っている。

東日本大震災に関する資料館でも、14時46分で止まった時計を見たことがある。この時計を見ると、震災が起きた当時の状況の悲惨さが伝わってくる。私は、この時間を忘れることができない。

原爆が投下されたあの日、そこに住んでいた人々は何をしていただろうか。畑仕事をしている人、昼食を作っている人がいたかもしれない。子どもたちは、何も知らず無邪気に遊んでいたかもしれない。そんな日常を原子爆弾は、一瞬にして奪っていった。時計そのものだけでなく、長崎の人々の時も奪ってしまった戦争という愚かな行為をそして、この11時2分という時間を決して忘れてはならないと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

毎年8月9日は長崎の人々にとって、平和を祈る大切な日になっている。その大切な日に式典に参加できたことは、私にとってかけがえない体験になった。

原爆投下により焼け野原となった長崎は、この先70年、草木は生えないだろうと言われていた。だが、約1か月後には30種類もの草木が芽吹き、虫たちが姿を現した。これにより人々は生きる希望を見出した。終戦から4年後、長崎市長は「平和宣言」を発表し、「平和は長崎から」を合言葉に町づくりを始めた。長崎の人々だけでなく、人間の力強さ、たくましさを感じることができた。

私は、長崎派遣で原爆の恐ろしさだけでなく、原爆が起きてから長崎がどのようにして復興していったのかを学ぶこともできた。一発の原子爆弾、一瞬の爆発であるが、町を復興するには何年もの月日が必要であるし、人々の心の復興はその何倍もの月日が必要である。

原子爆弾は絶対に廃絶しなければならない。

しかし、世界を見渡すとまだ多くの戦争が続いて、多くの人々が不安に怯え、苦しんでいる。そして、もしかしたらそれらの戦争で核爆弾が使われてしまうかもしれない。長崎で学習した経験を生かし、戦争の恐ろしさ、原子爆弾の恐ろしさを伝えていきたい。世界中の人々が「地球市民」を意識できる世界になってほしい。

これからも続け！ 平和への歩み



郡山市立郡山第一中学校2年 山口翔乎

1 派遣研修への参加に当たって

「戦争」。8月になるとニュースでよく耳にし、教科書でもよく出てくる言葉だ。身近にあるが、よく知らない言葉でもある。私は、戦争について「もう二度と起こしてはいけないもの」ということは分かっているが、戦争はもちろん、原爆がどういうものかも詳しくは知らなかった。戦争や原爆について、みんなも知りたいのではないかと思い、私が学んだことを色々な人たちに伝えたいと思った。また、私たちは現在、平和な生活ができているために、平和の大切さを見逃してしまう。平和の大切さについて、改めて知ってみたいと思った。さらに、派遣研修に行く前に長崎のことを調べてみると、長崎市の人口は約39万人と郡山市より人口が多いことを知った。原爆で被害を受けたにも関わらず、79年間で発展した長崎市を見てみたいと思った。以上のような想いを胸に派遣研修に参加することにした。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館・如己堂（によこどう）

永井博士は、長崎県で放射線医学の研究や患者の診察をしていた。博士も被爆して重傷を負ったが、被災者の救護活動を行った。また、寝たきりとなってからも、原爆の恐ろしさなどを後世に伝えるためにたくさん本を書いた。

如己堂は、地域の方々が博士のために建てた家で、亡くなるまでの三年間を過ごしていた場所である。また、その隣には永井隆記念館があり、博士の一生を知ることができる。人々のために尽くした博士は、様々な言葉を後世に残している。そして、色々な人々に生きる勇気を与えている。

その中でも、私が一番心に残ったのは「どん底に大地あり。どん底まで落ちて、そこから立ち上がることでできたのは、希望をしっかりとっていたからである。」という言葉である。原爆が落とされた後の長崎は、何もない焼け野原。家や家族をなくし、生き残った人の辛さは「どん底」だったと思う。だが、その長崎が復興できたのは、長崎に住んでいる一人ひとりが、希望をもって復興に力を尽くしたからだと思う。私も、辛いことがあっても、希望をもち、立ち上げられるような人間になりたいと思った。

(2) 青少年ピースフォーラム

2日間の間で、私は色々なことを学ぶことができた。その中で一番心に残っているのは、被爆体験講話だ。

今回、お話してくださった松尾幸子さんは、11歳で被爆した。幸子さんは無傷だったが、家族の中には亡くなられた方や、けがを負った方がいた。私は、もし、自分の家族が突然亡くなったり、けがをしたりしたら、恐怖を感じると思う。

幸子さんは、「原爆が落とされた辛い体験を他の人には、二度としてほしくない。」と語られ、「おろかな戦争が二度と起きないことと、核兵器が一日でも早くなくなることを願っている。」と話してくださった。平和のために、自らの辛い体験を話してくださった幸子さん。その話は、とても貴重なもので、戦争を知らない私たちにも分かりやすい内容だった。私は、被爆体験講話も含め、今回学んだことを、伝えていくことが大切だと思った。



< 2024年の長崎 >

3 心に残ったこと

長崎では、原爆が落とされた後の写真をたくさん見た。建物がなく、人や動物の気配もない。ただ静かで、そこだけ時間が止まっているようだった。とても衝撃的な写真だった。また、原爆の威力で形が変形し、11時2分で止まっていた時計もあった。しかし、私が一番心に残っているものは、今の長崎の景色である。原爆が落とされた後の長崎は「70年は草木は生えない。」といわれていた。しかし、その一か月後には草木が生えたといわれている。そのことを知り、勇気づけられた長崎の方々は、壊れた建物を集めて小屋を建て、住み始めたといわれている。また、永井博士が再び花咲く場所にしようと桜の苗木を千本買い、色々なところに植えたそう。その結果が、79年たった今、私の目の前に広がっていて、美しい街並みがあり、とてもにぎわっている。夜になるとその美しさは増して、日本三大夜景の一つにもなっている。私は、今の長崎の景色を見たとき、「すごい」という言葉しか出てこなかった。「原爆が落とされた11時2分で終わらない。」と、長崎の方々が力を尽くした結果が今の長崎の景色だ。私は、長崎の方々の力強さを感じた。この景色は平和の象徴だと思う。私は、これからも守っていかなければならない景色だと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の派遣研修で、実際に原爆が落とされた場所でしか知ることができない、戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさを学ぶことができた。戦争についての理解も深まり、戦争を二度と起こしてはならないと改めて思った。

また、長崎の文化や歴史に触れることができた。原爆が落とされて、壊れてしまった昔ながらの建物、消えかけた文化がたくさんあったと思う。しかし、浦上天主堂などの復元された建物や、江戸時代から約390年続いている「長崎くんち」、室町時代や江戸時代からあるカステラや一口香などのたくさんの文化や歴史が、原爆が落とされたことによる被害を乗り越えて続いている。

長崎の人たちは、一人ひとりの力を合わせ、大きな力にして、79年間、平和の尊さを発信しながら発展してきた。私は、79年間、平和だったからこそ今の長崎があるのだと思う。

今回学んだことは、長崎でしか学べない貴重な体験ばかりである。私の使命は、「今回学んだことを伝えること」だと思う。

文化や歴史など、昔から代々伝わってきた伝統を、これからも継承していかなければならないと思う。原爆が落とされたという歴史と、平和の大切さと共に……。

平和を想う気持ちを、未来へ



郡山市立郡山第二中学校 2年 木村 壬桜莉

1 派遣研修への参加に当たって

79年前日本に2発の原子爆弾が投下され、多くの尊い命が奪われた。こんな悲惨な出来事があったにもかかわらず、今なお世界各地で戦争が起きており、あの頃よりも強力な原子爆弾を所持している国もあるのが事実だ。

私は今まで、原爆について書かれている本を読んだり、調べ学習などで原爆について学んだりしたことで、原爆の恐ろしさは知っているつもりだ。しかし、言葉だけでは分からない、実際に原爆が投下されたその現場に行くからこそ体験できるものがあると考えた。それを実感し、もっと深く、詳しく原爆について学び、平和が続く世界にするため、若い自分たちに何ができるのかを模索したいと、参加を希望した。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

資料館には、熱線によって溶けた瓶、11時2分で止まっている時計、長崎に投下された原子爆弾「ファットマン」などが展示されていた。その中で特に私が印象に残った展示物が2つある。1つ目が、亡くなった赤ちゃんの弟を背負い、火葬する順番を直立不動で待っている子どもの兄の姿の写真だ。泣きたい気持ちを歯を食いしばって我慢し、放射線の影響で出る鼻血に栓をしている兄の姿に、私はとても辛い気持ちになった。2つ目はおにぎりを手に持ちながら呆然と立っている母とその子どもの写真だ。お米をもらえて嬉しいはずだが、あまりにも無惨な辺りの様子、様々なものを失った悲しみで呆然とし、手に取ったおにぎりを口に運べない姿に、食べることさえも忘れるほどの絶望など、自分には想像もつかないと恐ろしく感じ

た。

(2) 青少年ピースフォーラム

私たち長崎派遣団は、2日間、青少年ピースフォーラムに参加した。他県の子どもたちも参加していた。1日目のこぢんまりフィールドワークの時、原爆の爆風で壊れた浦上天主堂の一部を見た。触ってみると、とても固くて驚いた。こんな頑丈な建物が爆風で壊れてしまうのかと爆風の威力の強さを感じた。

その後、原子爆弾についても学んだ。原子爆弾が爆発した時に生じるエネルギーは、爆風が50%、熱線が35%、放射線が15%であると知った。爆風は秒速440mの威力で吹いていたと聴いた。そして、熱線は約3,000度で、地上の近いところに太陽が出てきたような感じだったそうだ。放射能の影響は、すぐに表れるのが下痢、頭痛、脱毛、倦怠感、吐血、後に表れるのが、がん、白血病などであることも知った。世界で核戦争が起きたら、本当に人類は滅んでしまうと聴き、原子爆弾の恐ろしさを改めて強く感じた。

2日目はケンカや戦争が起こる理由、またその解決策についてみんなで話し合い、「My 平和宣言」を書いた。他県の他の人たちと意見を交わしたことでたくさんの気づきがあり、深く考えることが出来た。



< 平和祈念像 >

3 心に残ったこと

この写真は有名な平和祈念像である。私に心に残ったことは、この像には一つひとつ意味が込められているということだ。

右手は「恐怖」、左手は「平和・世界平和」、右足は仏教の座禅ということで「被爆者への祈り」、左足は立ち上がろうとしていることから「復興」、男性で筋肉がついているのは「力強く平和を祈る」という意味が込められている。

小学生の頃、初めて平和祈念像を見たときには、「このポーズ面白いな」としか思っていなかった。だから今回、像に込められている意味を知り、驚いた。そして、この像は、世界みんなの平和を願う想いが込められているのだなと感じた。

また、その時説明してくださっていたガイドさんの「平和公園には全てに意味が込められている」という言葉を聴き、ここはみんなの想いが詰まった場所なのだと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

この4日間の長崎派遣は、私にとって忘れられない経験となった。3日目に参列した平和祈念式典は、おそらく2度と経験できないことだろう。そしてこの4日間で私は、戦争の愚かさ

や原子爆弾の恐ろしさを本気で感じた。

なぜ戦争は続くのだろうか。それは、互いに愛が無いから、また、戦争の恐ろしさを忘れてしまっているからなのではないのかと私は思う。もし、原子爆弾の恐ろしさを忘れてしまい、相手への愛も失ってしまって、核戦争が起きてしまったら、人類滅亡へと進んでいってしまうだろう。今の平和な生活は、原子爆弾の犠牲となった方々の訴えによって守られていることを忘れてはいけない。平和が続く世界にしていくためには、世界へ核兵器廃絶や平和の尊さを訴え続けるべきだと思う。

研修中、様々な場面で平和を願う声を何度も聴いた。永井隆博士からは「戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけである!」、被爆者からは「愚かな戦争はもうやらないで。核はもう廃絶してください。」このような声を、若い世代である私たちが、世界へ、そして未来へと繋げていく必要があるのだと私は思っている。

平和祈念式典の際、長崎市長はこう言っている。

「平和をつくる人々よ!一人ひとりには微力であっても、無力ではありません。」

この言葉を胸に、平和の尊さを訴え続けていきたい。

平和の実現を目指して



郡山市立郡山第三中学校2年 西山遥大

1 派遣研修への参加にあたって

小学生の頃に「戦争について真剣に考えたことがあるか」という質問をされたら「いいえ、考えたくありません」と答えていただろう。戦争という残酷で恐ろしいことなんて知りたいたとは思わなかった。しかし、2022年のロシアによるウクライナ侵攻や翌年2023年のイスラエルによるパレスチナ侵攻といった戦争のニュースを見るたびに、戦争がいかに身近なものであるかということを感じた。「今、戦争を知るべきではないか」という自分の思いもあったが、なかなか一歩が踏み出せなかった。そんな時、先生から長崎派遣事業に参加しないかと聞かれた。私は「長崎は最後の被爆地である。そこで戦争を知るきっかけになるのでは。」と思い参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館には、11時2分に止まった時計や溶けた瓶、熱線を浴びて炭になった人の写真、長崎に落とされた原子爆弾「ファットマン」の実物大の模型など1,000を超える資料が展示されていた。その資料の中で印象に残ったのは、「ファットマンの実物大の模型」である。大きさは長さが約3m、直径が約1.5mほどで何百mもあると思った私の想像より小さいものだった。それと同時に、こんなに小さい1つの爆弾によって、何万人もの命が失われたと思うと、悲しみと怒りが込み上げてきた。しかし、日本も無差別に人に攻撃し、たくさんの命を奪っているはずである。「戦争で被害を受けたのは日本だけじゃない。」ということ資料館で思い知らされた。

戦争によって心身ともに傷ついた人は大勢いる。戦争をして残るのは悲しみと後悔だけだ。私は改めて平和をいち早く実現させることが世界の最重要項目であることを知った。

(2) 青少年ピースフォーラム

2日間行われた青少年ピースフォーラムでは、平和の尊さを学び、他の地域の中学生と交流し平和についての意見交換を行なった。特に11歳で被爆された松尾幸子さんの被爆体験講話は私の心に大きく刺さるものがあった。

松尾さんは爆心地からおおよそ1.3kmの場所で被爆された。本人は幸い無傷だったが、父や兄、姉、叔母を被爆で亡くされた。被爆前後の様子や周りの人と一生懸命必死で生きてきた時の状況は、想像を絶する残酷さであった。私だったら、こんな苦しい状況下で暮らすことなどできないと思った。「戦争はなんて悲惨なものなのだろう。戦争をして何を求めたいのだろう。」そう思っても自分の手を握りしめるしかなかった。しかし、最後の松尾さんの言葉は、自分は無力ではないこと教えてくれた。「私の願いは、愚かな戦争を二度としないほしい。核を1日でも早く廃絶してほしい。そしてこの話を、核兵器の恐ろしさ、むごさを伝えてください。」力強く放った言葉に思わず涙が出た。「自分だったら思い出したくないような経験を必死に訴えている松尾さんの想いを無駄にはできない。」「自分の言葉が世界を動かすことはできないと言われたって、友達や家族を動かすことはできるじゃないか。」そう思った私は、より一層自分から平和の尊さと核廃絶を最前線で訴えなければならないと強く心に誓った。



＜原爆により壊れて残った浦上天主堂の壁の一部＞

3 心に残ったこと

これは、爆心地から500mの地点にあった浦上天主堂の壊れて残った壁の一部である。元にあった場所から移築されている。壁には黒く焼けこげた跡やレンガがかけられている場所があり、原爆がいかに恐ろしいものであるかを実感した。この原爆によって、何万人もの尊い命が奪われたことを忘れてはならない。被爆して熱線を浴びた人は、身体の中の水が沸騰、蒸発し、炭になってしまう。建物は倒壊し、火傷した皮膚と服がくっついてドロドロになっている人が「水、水…」と助けを求めている地獄のような光景を実際に見たことがあるだろうか。そのような光景がたった一つの原爆によって実際に起きてしまったのである。

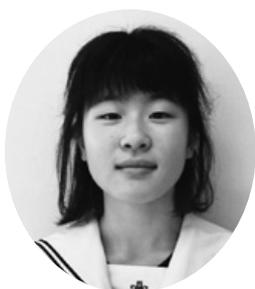
この原爆は、被害が大きくなるように上空500mで炸裂したということを平和案内人の方がおっしゃった時には、あまりにも残酷すぎる考え方だと感じ、言葉を失った。核兵器廃絶を改めて願い、戦争と向き合わなければならないと思った瞬間だった。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の長崎派遣事業を通して、「戦争」というものは愚かで何も残らない残酷なものだということを知った。また、資料や被爆体験講話で、「核兵器」というものがいかに無関係な人の命を奪い去っていくむごいものかを知った。「平和」という、みんなが幸せに日々を過ごすことのできる状態に向けて、自分から友達などに伝えていくことによって、その友達がまた違う人に伝え、そして、この世界の人全員が同じ気持ちになるまで、私は積極的に訴え続けていくと決めた。

原爆をもう二度と落とさせない。この記憶を風化させない。それだけでなく、外国で起こった戦争も風化させてはならない。そのためには、まず自分が感じたことを広く伝えて、松尾さんをはじめとする被爆者の方々から受け取ったバトンを今度は私が渡す立場にあることを理解する。そして全員にバトンが渡せるように、また、次の世代にも渡せるようにする。そうすれば「平和」を実現することができるかと信じている。そのために自分がすべきことは何か。自分は何をしたら「平和」な世の中を作ることができるのかを考え、私は、「これから」を一生懸命生きていく。「平和」と呼ばれる日々が訪れるまで。

絶えない戦争



郡山市立郡山第四中学校2年 柳 沼 眞 結

1 派遣研修への参加に当たって

「戦争」それは絶対にしてはいけないこと。
人はそのことを知っているはずなのになぜしてしまうのだろう。

今、世界で「戦争」が繰り返されている。

「戦争」が繰り返される度にかげがえのない命が失われると思うと、胸が苦しくなる。

そして今日もまた、たくさんの命が失われている。とても悲しい現実だ。

私が、長崎派遣に参加しようと決意したのは昨年、参加した先輩の発表を聞いて、とても衝撃を受けたからだ。私はまだ、「戦争」の恐さを知らなかった。先輩の発表を聞き「戦争」の恐さを知った私は、このことを次の世代の人たちへ伝えていきたいと思い参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館に展示されていた一つ一つの物にとっても衝撃を受けた。溶けた6本の瓶、板壁に残ったはしごと監視兵の影、女子学生の弁当箱など資料館には約1,500点もの被爆当時の資料が展示されていた。私が特に印象に残った展示物は、「手の骨とガラス」という手と熱線で溶けたガラスがくっついたまま亡くなってしまい、そのままガラスが固まり手の骨だけが残っているものだ。これを見て私は、悲しさのあまり声が出なかった。その展示物は、まるで助けを求めているように見えた。これらの展示物から原爆の威力の恐さ、悲惨さをこの目で実感した。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは、平和学習を行うために2日間行われた。1日目は、「被爆の真実を学ぼう」ということで、被爆体験講話や原子爆弾についての基礎知識を学んだ。被爆体験を語った松尾幸子さんのお話は、一つ一つの言葉が重く、当日の光景が私の頭の中に映し出されるようだった。松尾さんは被爆してから何年か経ち、ある内科の先生にこう言われた。

「あなたはかわいそうだ」

「病名もわからない病気にかかっているから」

私はこの言葉を聴いて怒りと悲しみが交じりあってあふれ出しそうになった。原爆の熱線を浴びると、色々な病気にかかってしまうことにとても驚かされた。松尾さんはこの言葉をおっしゃっているとき、とても悲しそうな表情をしていた。実際に被爆した方からお話を聴くことは、とても貴重な時間だった。

2日目は、「平和・自分たちの未来について考えよう」について、各県から来た中学生と10人で班をつくり「ケンカ・戦争の原因は何だろう」というテーマに沿って意見交換を行った。最初は、少し不安はあったがみんな優しい人ばかりで会話がとても楽しかった。私は会話中に「戦うのではなく、こういった話し合いの方が世界は今よりもっと平和になるのではないだろうか」と思った。意見を聴くと「相手に自分の強さを見せつけたい」や「相手の意見を聴こうとしない」といった意見が多かった。そこから、どう解決するかということで「武力を使わない」や「相手の意見を聴く」という意見にまとまった。各県から来た中学生たちの意見を聴いたことはとても忘れられない体験だと思った。



< 多くの命を奪った爆弾 >

3 心に残ったこと

最も目に焼き付いたのは原子爆弾「ファットマン」のレプリカである。この原子爆弾の長さは3.25m、直径1.52m、重さ4.5tのプルトニウム型原子爆弾である。これが爆発した時のエネルギーは、爆風50%、熱線35%、放射線15%の割合になる。熱線は3,000～4,000度までに達したそうだ。これを見て、こんな小さい原子爆弾がたった一発で街を吹き飛ばしてしまう、恐ろしい物だと思った。何より、これを作ったのは私達と同じ人間だということが、とても複雑な感情をもたらした。

4 派遣研修に参加して感じたこと

本や写真を見て学ぶより、実際に自分の目で見て肌で感じて学んだ方がより印象に残った。8月7日に初めて長崎の街を見た時、自然豊かで商業が発展しているこんな素敵な街になぜ爆弾を落とさなければいけないのか、と信じられない気持ちでいっぱいだった。長崎を最後の被爆地にするためにも私達はこれからも次の世代の子どもたちに戦争の恐ろしさや命の尊さを伝えなければいけない使命がある。私はそう感じた。

今、世界で使われうる核弾頭の数9,583個。日本は核兵器を持っていないが世界のどこかの国が核兵器を持っている。なぜ、核兵器を持つことをやめないのだろうか。もう二度と核兵器を使ってたくさんの命を奪わないでほしい、と私は願う。科学の力を戦争ではなく、世界平和のために、たくさんの命を守るために有効活用できることを期待したいと思う。

平和を願って…



郡山市立郡山第五中学校 2年 石垣 凜 空

1 派遣研修への参加に当たって

「平和」とは何か。近年、ウクライナ侵攻やアフガニスタン紛争など、世界平和が至る所で着目されている。しかし、争いは収まるどころか悪化しつつある。このような現状で、世界平和が実現するのだろうか。戦争が起こる時代は「平和」とは程遠く、自由もない。

私は原爆について「1945年8月9日、長崎市に原子爆弾が落とされた」という明白なことしか知らなかった。まず、怖くて知ろうともしていなかった。そのため、先生や先輩からこの長崎派遣事業について聞いた際、「原爆」や「平和」を学ぶ好機だと思い、今回の長崎派遣に参加を希望した。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

原爆投下時間の11時2分で止まった時計、熱傷痕の写真、影だけ残った壁の写真。どれも見るだけで胸が苦しくなるような、生々しいものばかりだった。たった一つの原子爆弾だけで、産まれたばかりの幼い子や、平和に暮らしていた家庭が一瞬で崩壊するような、様々な残酷で悍ましいものがそこにはあった。

特にその中でも、被爆当時の写真是印象的だった。元々沢山の家々があった場所が家どころか草木一つもなくなっていたのだ。その写真から原爆の恐ろしさを改めて実感した。そして、私たちが話を伺ってきた被爆者の方々は、このような中懸命に生き延びてこられたのだと知り、とても尊敬した。また、核兵器はなくなるべきだと、強く実感した。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、1日目に被爆体験講話で松尾幸子さんのお話を聴いたり、戦争の疑似体験をしたりした。

特に戦争の疑似体験が印象的だった。普段の生活で、突如鳴り響く空襲警報。空襲で見ると堪えない光景となった町。被爆体験講話の後だったため、光景が容易に想像できた。そして一生懸命生き延びても、初めにカードに書いていた「大切なもの」「大切な人」「大切な場所」が1、2個しか残っていなかった。これが実際に起きていたと思うと戦争の恐ろしさをより実感した。

2日目には全国の自治体の人と班になり、「喧嘩・戦争の原因は何なのか」や「喧嘩・戦争をなくすにはどうすればよいか」を話し合った。話し合いでは、同じ班の高校生の「文化の違いや宗教関係などが原因ではないか」という発想が素晴らしいと思った。一人ひとりの意見が異なり、考え方の幅を広める事が出来た。

(3) 平和祈念式典

8月9日の平和祈念式典では、実際に平和公園会場に参列する事が出来た。実際行かないと分からない人々の想いや児童合唱の重み、長崎市長や被爆者の誓いなど、大変貴重な経験をすることが出来た。また11時2分、黙祷の際「核兵器がなくなり、大切な命が一つでも多く救われますように。そして私たちが小さな力でも世界を少しでも変えよう」と強く願った。



< 平和の泉と石碑に刻まれたメッセージ >

3 心に残ったこと

この石碑は体中にひどいやけどを負って、水を求めた当時9歳の山口幸子さんにより、書かれたものである。被爆者の多くは「水を、水を、」と水を求めてさまよっていた。しかし、水を飲むと、安心して緊張が解け、亡くなってしまう。そのような痛ましい霊に水を捧げ、冥福を祈り「平和の泉」を建設したそう。これを聞いた時私はなんと残酷で恐ろしいことかと、鳥肌が立った。そして「絶対これを繰り返してはならない」そう感じた。

更に石碑に刻まれた言葉には「どうしても水がほしくて、とうとうあぶらの浮いたまま飲みました」とある。今の私たちなら目を疑う一文だった。しかしこの時は生きるのに精一杯で、危険と知りながら飲まなくては行けない状況だったのかと、改めて原爆の恐ろしさを実感した。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私はこの4日間の長崎派遣を通して、学校では学べない戦争の詳細や、命の尊さを学ぶ事が出来た。初めは4日間の研修ということで不安な事が多々あった。しかし実際、4日間、様々な中学生と関わり、一緒に学ぶことで意見を伝えあい、考えを共有することができた。コミュニケーションや学ぶ意欲など、学習面のみならず、これからの社会に必要な事も学べたと感じている。

そして何より、今回の研修で「平和」や「戦争」について、4日間じっくり考える事が出来た。原子爆弾の恐ろしさを知りながら核兵器を保有する国があったり、毎日「死」と隣り合わせである人がいたり、課題点も多くある。しかし、「戦争を経験した人」「被爆した人」など多くの人々が体験を語り継いでくれるからこそ平和が成り立つと思う。今、戦争・原爆を知る人が減りつつある。このような悲劇はもう二度と引き起こしてはならない。風化させてはならない。ひいては現世代の若い人たちへ周知させ、平和な次世代の為に歩んでいく必要がある。「平和」の為に一人ひとりが、小さな力でも行動していくべきだと思う。そして私も「平和」の為に何が出来るか考え、この経験を広めてゆきたい。

私にできること



郡山市立郡山第六中学校2年 渡邊 采音

1 派遣研修への参加に当たって

「平和」とは何だろうか。この研修中、また研修から帰ってきた今、何度も私の頭の中をめぐっている。

正直、私にとって戦争は、あまり関わりのないもので、遠い存在であった。実際に戦争を体験した曾祖父母たちは、私が生まれた時には他界していた。祖父母たちから昔のことを聞いたことはあったが、あまり実感はわかenかった。また、教科書や本などで、戦争を取り扱った題材の読みものを読んだことはあったが、やはり自分のこととして考えることはなかった。

世界では、今なお戦争が続いている。戦争とは、そして平和とは何かについて、私たちは、考えを改めなければいけないのではないかと考えるようになった。そこで、今回の研修に参加することを決めた。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館では、原子爆弾が落とされた時の状況や、それがもたらした被害などを見学した。

原爆が落とされた11時02分を刻んだままの時計、高熱の熱線で溶けた瓶、そして長崎に落とされた原爆「ファットマン」の実物大模型などが展示されていた。私が想像していた以上に、原爆の被害は大きく、とても恐ろしくなった。

これだけの大きな被害をもたらした核兵器を、世界は今でも作り続けていることを私は初めて知り、とても驚いた。また、その威力はさらに増していると聞き、恐ろしさを強く感じた。核兵器の被害を知りながら、なぜ作り続けるの

か。人々の命より大切なものはあるのか、私は恐ろしさと共に、怒りも感じた。

(2) 平和祈念式典

長崎に原爆が落とされた8月9日。平和祈念式典が行われた。岸田総理や長崎市長による平和への想いを視聴し、黙とうをささげた。何より心に残ったのが、被爆者の話である。平和のためには、核兵器を世界中からなくさなければいけないのだという強い意志を感じた。

青空の元、平和の鐘が鳴り響き、白い鳩が大空へ飛び立った。私も、平和への思いを強くした。

(3) 青少年ピースフォーラム

1日目、ゲームを行った。大切な人・物・場所をカードに書き出す。「もし戦争が起きたら」という設定で、戦況が悪化していく度、カードが1枚ずつ減っていくという内容だ。私は、家族・ピアノ・学校とカードに書き、その全てがなくなってしまった。当たり前にあることが、手からこぼれていくということが、悲しくむなしかった。そして、戦争が起こってしまえば、あっという間に自分の大切なもの、そして自分の命までもがなくなっていくのだということを、肌で感じた。

2日目、被爆体験長崎派遣事業に参加した他県の方々と、意見交換する場が設けられ、「戦争の原因は何か」「けんかが起こる原因は何か」についてグループごとに話し合いを行った。宗教・文化の違い、利己的な考え方、貧富の差など、様々な意見が出された。原因は様々であるからこそ、世界中から戦争はなくなるのだということを知った。



＜復興をとげた美しい長崎市の街並み＞

3 心に残ったこと

私は、被爆した方々の話を聞いたり、数多くの原爆に関する資料を見たりした。その中で一番心に残ったことは、長崎の復興の力である。

たった1つの爆弾で、家族や大切な人を失った悲しみ、美しい街並みが一瞬で灰になった怒り、全てがなくなってしまった喪失感は計り知れない。今回の研修を通し原爆の悲惨さを学んだからこそ、今はその想いが少しは分かるようになってきた。

しかし、現在の長崎はとても美しく、人々からは笑顔があふれていた。長崎市内を見渡してみても、戦争の面影はほとんど残っていない。長崎の復興には、とてつもない時間がかかると言われていた。しかし長崎の人々は、その悲しみを乗り越え、見事に短期間で復興を果たしたのだ。人々の生きていくことへの前向きな姿勢、そしてその強さに私は感動した。

一方で、絶対に忘れてはいけないのが、今の平和は、たくさんの人々の犠牲と苦労や努力の上で成り立っているということである。それらを忘れてしまっては、また同じ過ちを人々は繰り返してしまうことだろう。だからこそ、時代が変わっても、原爆の恐ろしさや平和の尊さについて、語り継いでいくことが大切であると感じた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の派遣事業を通し、私は何より、戦争を自分のこととしてとらえることができるようになった。戦争の悲惨さ、そして平和であるということが、当たり前ではなく尊いものであると学ぶことができた。

研修中は、心が痛む写真や話があり、目を背けたいことも多々あった。しかし、それが戦争の現実なのである。そして、79年前の日本で起きていた事実なのである。戦争を経験した方々は、その悲惨さを絶対に忘れない。しかし時間が経過するにつれ、人々はこれほどの悲惨な事実さえ、あっという間に忘れていってしまう。研修に行く前の私がそうであったように、怖いことや嫌なことからは目を背けてしまうのだ。

しかし、そうではいけない。今の平和は、当時の人々の犠牲の上に成り立っていること、そして、もう二度と繰り返さないために、戦争が悲惨であることを絶対に忘れてはいけないのだ。

現在、世界には多くの核兵器が存在している。人々から争いはなくならないのかもしれない。しかし、その争い的手段に核兵器を持ち込んで絶対にはいけないのだ。世界中から、一刻も早く核兵器がなくなり、本当の「平和」が訪れるよう願うと共に、この記憶をいつまでも語り継いでいきたい。

戦争のない世界へ



郡山市立郡山第七中学校2年 遠藤暖心

1 派遣研修への参加に当たって

僕は今、本当に平和な毎日を送っている。食べ物に困ることもなく何不自由ない生活を送れている。大好きな水泳にも通えている。そんな不自由ない生活を送れているはずなのに、それ以上を望んでしまうことがある。

今もなお、戦火の中苦しんでいて生活もままならない人たちがいるということ、家族や友人を失い苦しんでいる人がいるということ……。 「戦争」という悲惨な出来事を、もう二度と繰り返してはいけない。年々被爆者が減少していく中、現地に足を運び話を聞き、自分の目で見て、心で感じたことを今後に伝えていきたいと思ひ、参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館・如己堂

永井隆博士は、長崎医科大学で放射線の研究や診察を専門としていた医学博士だ。

長崎原爆で最愛の妻を亡くし、そして自らも被爆し重傷を負いながらも無事だった仲間たちとともに救護活動にあたった。記念館に入ってまず目に入ったのは、永井博士の生涯が書かれた展示パネルだ。彼の幼少期のころから原爆投下後の活動までが詳しく説明されていた。さらに映像コーナーもあり、永井博士本人のインタビュー映像や、彼が語った平和の重要性についてのドキュメンタリーが流れていた。記念館の隣には、如己堂という永井博士が2人の子どもたちと生活していた家があった。ここで永井博士は自身の白血病の療養をしながら執筆活動に励んだ。如己堂の意味は「己の如く人を愛せよ」というキリスト教の言葉からとったそうだ。原爆によって亡くなった人々の心を忘れず自分も

その愛に生きようという意味が込められている。

永井博士は長年研究に取り組んでいた放射線の影響により、被爆前に既に白血病を患い、余命3年と宣告されていた。余命宣告されて6年、昭和26年5月1日に幼い2人の子供たちを残して永眠した。

最後の最後まで平和実現を広く訴えた人だ。とても考えさせられた。

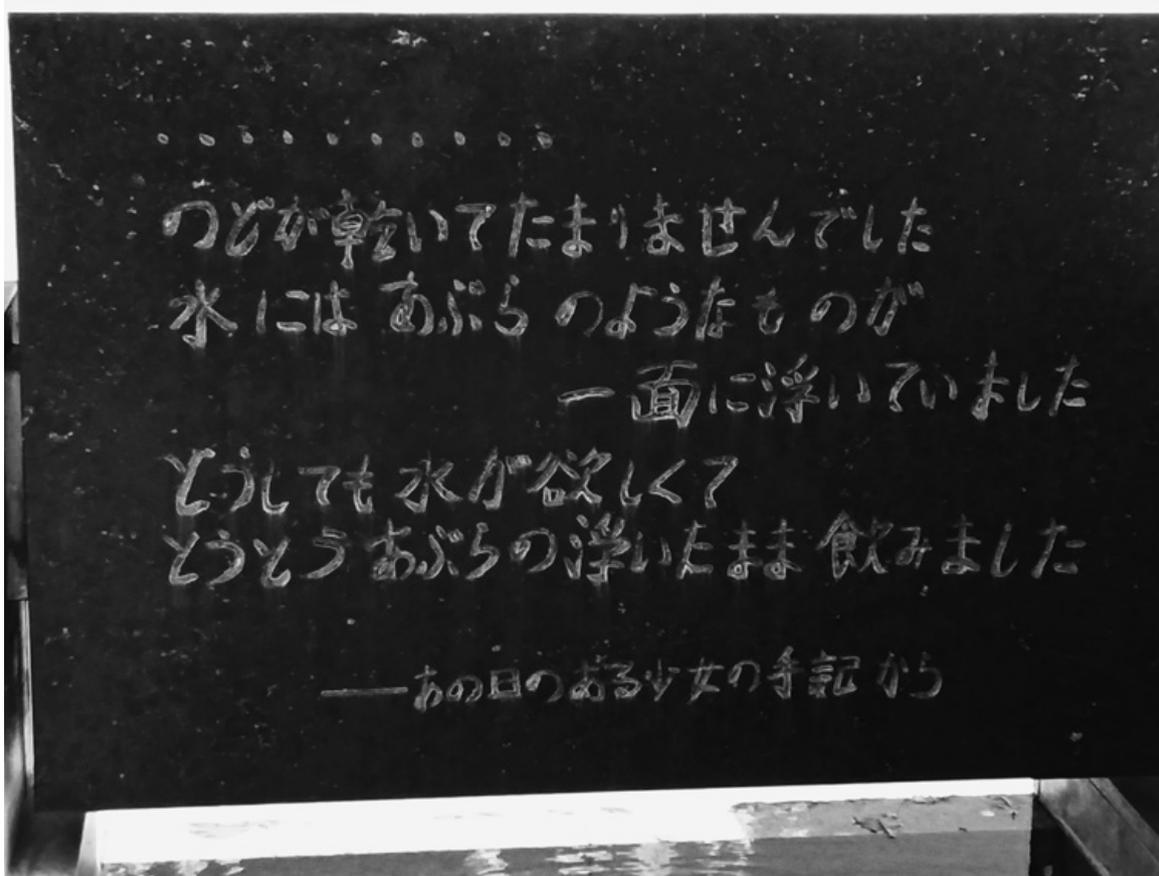
(2) 原爆資料館

長崎原爆資料館では、被爆直後の惨状を伝える浦上天主堂の壁の模型や、爆風により変形し破壊された柱時計を見ることができる。時計は11時02分で止まっている。原爆が落とされた瞬間だ。この瞬間に沢山の人の命が奪われたのかと、その瞬間を想像すると何とも言えない。大切なものを一瞬にしてなくなってしまった人々の辛さ、苦しみがどれほどのものだったのか……。とても悲しい気持ちになった。

それ以外にも展示や写真、映像で当時の状況を学ぶことができ、平和について学び考えることができた。原爆被害の惨状は見ていて本当に辛くなったが、改めて平和の大切さを考えさせられる施設だった。

(3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムの被爆体験講話では、松尾幸子さんのお話を聞くことができた。当時の松尾さんは、僅か11歳で被爆した。松尾さんは奇跡的に無傷だったが、家族は怪我や火傷を負った。爆心地から0.7km地点にあった我が家は跡形もなく焼けてしまい、姉、父、兄2人、兄嫁、叔母2人を原爆により亡くしている。その時家族を亡くした松尾さんは何を思ったのだろうか。想像するだけで胸が苦しくなった。



< 少女の手記 >

たった1発の原爆により奪われた多くの命がある。核兵器廃絶の大切さを心から痛感した。

平和学習では戦争によって失われるものの疑似体験をした。戦争により自分の大切なものがどんどん奪われていくこと、平和な日常が一瞬にして消え去ってしまうということ。平和の尊さを学んだ。

3 心に残ったこと

平和祈念像。日本人ならきっと誰でも知っている像だが、改めて実際に目の前にすると本当に大きい。

天を指す右手は原爆の脅威を、左手は平和を、閉じた瞳は犠牲者への冥福を祈る気持ちを、横にした右足は原爆投下直後の長崎市の静けさを、立てた左足は救った命を表している。

長崎に原爆が投下されてちょうど10年目に造られたというこの像を前にして、改めて平和の尊さを感じた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の長崎派遣に参加して、沢山の事を学ぶことができた。長崎の歴史はとても深く原爆もその1つだ。実際に被爆者の方の話を知ると、原爆投下から79年たった今でも原爆の後遺症に苦しむ人々がいることを知った。原爆は人や物に大きな被害を与えただけではなく、人々の社会生活そのものを一瞬にして破壊、そして消滅させた。原爆により心身に及ぼされた傷害は時間が経過しても癒えることがなく、特に放射線の恐ろしさを感じた。

今もなお核保有国は存在する。1945年広島、長崎に原爆が投下されて以降、実戦で核兵器は使用されていないが、今も核兵器を巡る問題は緊張感を増している。

戦争によって失うものの大きさ、今まで感じたことのない喪失感……。

核兵器のない世界になることを心から願うとともに、今回学んだことをしっかりと後世に伝えていく事が自分の役目だと感じた。

素晴らしい経験をさせてもらった事にとても感謝している。

長崎で学んだこと



郡山市立緑ヶ丘中学校2年 齋藤凜香

1 派遣研修への参加に当たって

私は「平和」がとても大切なことだと知っていた。でも、世界が本当に平和になるために、自分が何かしようとか、詳しく調べようとかはしたことがなかった。この長崎派遣事業の話があった時、そんな私にとってこれは良い経験になると思い、参加した。この機会を大事にして、自分自身を成長させたいと思ったからである。

事前学習として、原爆投下の経緯など色々なことについて調べてみると、私が知らなかったことばかりだった。「長崎」は原子爆弾を落とされた2つ目の場所という認識しかなかったが、本当は九州の小倉の予定だったことが分かった。また、研修に行く前は、戦争は遠い国でしているけど私たちには関係ないことで、私たちにできることはないと思っていた。だから、思い込みを排し、本当のことを学ぼうという思いで参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 城山小学校

研修1日目の午後、私たちは城山小学校を訪れた。城山国民学校は、爆心地から500mの場所にあり、爆心地に一番近い国民学校だったそうだ。爆発した時、学校にいた教職員も、学校に通っていた児童も、ほぼ亡くなったという。そんな被害を受けたのにも関わらず、被爆した校舎が残っていることはとてもすごいと感じた。未来に原爆の恐ろしさを伝えるために残ったのかなと思った。

一番印象に残ったものは、カラスザンショウである。被爆しながらもかろうじて生き残り、ムクの木に支えられて生きていた。もう枯れてしまった木が、校舎の中に展示されていた。今

も原爆のすさまじさを伝え続けている。私自身にもこの木から、色々なことが伝わってきた。原爆のことももちろんそうだが、被爆しても生き続ける生命力の強さがとても印象的だった。被爆した人々も、このような自然の力に励まされ、ここまで復興してきたのではないかと思う。

(2) 原爆資料館

2日目は、原爆資料館を訪れた。ここでは、平和案内人というボランティアガイドの方に説明していただいた。当時の状況を詳しく知ることができ、あの日何が起こったのかを考えた。

たくさんのも物が展示してあった中でも、印象に残ったものは、11時2分で止まった時計だ。これは展示ゾーンの一つ初めに展示されていた。もう永遠に動かない時計を見て、心が苦しくなった。これは、爆心地から800m離れた民家にあったものだそうだ。ひねられたようなフレームや、波打って曲がった文字が原爆の威力を物語っていた。これを見ていると、私たちにあの一瞬の恐ろしさを訴えかけているようだった。これからも、原爆資料館を訪れるたくさんの人々に、訴えかけていくのだろうと思った。

また、溶けて複数の瓶が固まっているものも、心に残った。この瓶からは、熱線による被害が伝わってきた。原子爆弾が放出したエネルギーは爆風・熱線・放射線で、それぞれ大きな被害をもたらした。この3つを合わせて原爆なのだが、瓶がこうになってしまうのなら、人間はどうになってしまうのだろうと考えると、ゾッとした。

たくさん展示物から、原爆の脅威が伝わってきた。このような大きな被害をもたらす爆弾を二度と使ってはならないと、改めて実感した場所だった。



< 平和を祈って… >

3 心に残ったこと

私が、研修の4日間の中で一番心に残ったのは、やはり平和祈念像である。上の写真の像を実際に見てみると、とても大きかった。この像の高さは約9.7m、重さは約30トンだそうだ。このポーズの一つひとつには意味がある。右手は原爆の脅威、左手は平和、顔は犠牲者の冥福を祈るという意味が込められているという。

なぜ、これが一番心に残ったかという点、テレビなどでしか見られないものを、実際に自分の目で見ることができたからである。自分の目できちんと確かめることで、そうすることでしか感じることができないことを、感じられたと思う。私が、予想していたよりも大きくて、伝わってくるものがたくさんあった。このような大きな像にすることで、長崎であった出来事を伝えているのだと思う。

広島と長崎であった悲劇を決して忘れてはならないということを実感した。あの日のあの一瞬に、どれだけの尊い命が奪われたのか、その時の人々の気持ちはどうだったのか、色々なことを考えさせられた。考えても分からないこともあるが、ずっとこの出来事を忘れないでいくことが大切なのだと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は、この4日間の研修を通して、自分には戦争のことを理解していなかったのだと分かった。事前学習でも、研修中でも、私の知らないことばかりだった。でも今の私は、前の自分よりも大きく成長していて、知識も増えていると思う。また、大きく考えが変わった部分もある。研修に行く前の自分は、戦争など自分に関係ないことだと思っていた。しかし、そんなことはなく、原爆が落とされたという事実や、昔の日本があるからこそ、今があるのだ。外国には内乱や紛争、戦争などが今もなお、続いている地域がある。それを止められる方法はないのかもしれない。でも、世界で唯一の被爆国の日本が、原爆の恐ろしさや平和の尊さを、世界へ積極的に発信していくこと、それが、全世界が平和になることへの第一歩なのではないかと思う。それに貢献するために、まずは長崎に派遣された私たちが、学校や家庭など色々な場所で、経験したことを伝えていくことが大切だと思う。

今、実際に被爆した人がだんだんと減っていることが課題だ。もし、被爆者がいなくなってしまうとしても、その話を私たちが受け継いで、後世に伝えていこうと思う。

平和への願い



郡山市立富田中学校 2年 星 温 斗

1 派遣研修への参加に当たって

2022年2月、ロシアによるウクライナ侵攻が始まった。そして、2023年10月、イスラエルによるガザ地区侵攻が始まった。僕はロシアのウクライナ侵攻が始まるまで、あまり戦争や紛争について考えることが無かった。

僕は小学校の社会の授業で広島・長崎に原爆が落とされたということを知ったのを思い出した。自分はそれで理解出来ていたと当時は思っていたけれど、戦争関連のニュースを見るたびに、本当に原爆について理解出来ていたのかと思うようになった。そのようなこともあり、実際に長崎に行って、自分の目で原爆の被害を見たり、被害者やガイドさんのお話を聞いたりして、原爆が如何に恐ろしい兵器かを理解したいと思い長崎への派遣研修に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 如己堂・永井隆記念館

永井隆博士は、長崎医科大学、今の長崎大学医学部で放射線医学を専門としていた医学博士である。1945年の6月に白血病と診断され、その2ヶ月後に職場で原爆により被爆しながらも無事だった医師や看護師と共に、被災者の救護活動を2ヶ月間行った。その後白血病が悪化し寝たきりになっても如己堂というカトリック信者達が永井隆博士のために建てた家で17冊にも及ぶ平和や愛をテーマにした本を書き上げた。そして、平和と命の大切さについて訴え続け、生きる勇気と希望を永井隆博士は人々に与え続けた。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは2日間に渡って行われた。1日目は被爆者の方の講話と原爆落下

地点周辺のこぢんまりフィールドワーク、そして原爆についての室内学習を行った。

2日目には平和祈念式典があり、その後は他校の生徒や地元の大学生達と一緒に班となって、何故喧嘩が起こるのか、またそれをどうやって防ぐか話した。最後にMy平和宣言を書いた。僕のMy平和宣言は「相手への思いやる気持ちを持つ」にした。理由は思いやりの心をもてば相手も思いやりの心を持つようになり、喧嘩には発展しないとと思ったからである。

(3) 平和祈念式典

8月9日、平和祈念式典が行われた。今年は、イスラエルの参列を認めず、それによって、日本を除く主要6カ国とEUの大使は参列しないという、異例事態の平和祈念式典となった。長崎祈念式典は、原爆によって亡くなった方を慰霊するもので、政治的な絡みで参列しないことに、僕は憤りを感じた。そして、午前11時2分、長崎の鐘が鳴り響く中、黙とうを捧げた。この1分間はとても長く感じた。この1分間は、原爆によって亡くなった方を追悼し、二度とこのようなことが繰り返し起こらないようにと願いを込めた。



＜ナガサキ誓いの火が灯る灯火台＞

3 心に残ったこと

この写真は、毎月9日に火が灯される灯火台である。爆心地公園に建てられており、市民の手で守られてきた。これは、「核廃絶と不戦を願うナガサキ誓いの火」と言われる。この灯火台に灯される火は、世界中から全ての核兵器が廃絶されるまで灯し続けられる。

また、灯火台横には全国の人々が寄せた平和を願うメッセージが陶板に焼き付けられ展示されている。ここには、ギリシャにあるオリンピアの丘から採火された「聖火」が灯される。オリンピック以外の目的で、聖火がギリシャ国外へ持ち出されることは極めて例外的なことである。

僕はこの話を聞いて、この灯火台に灯された火が人々の一刻も早い核兵器廃絶を求める思いを、目に見えるものとして、世界中に発信しているのだと感じた。これを見て、核保有国は核兵器廃絶を進めて欲しいと思う。そして、この灯火台に火が灯されない時が来ることを願うばかりである。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の4日間の長崎派遣事業を通して強く感じたことは、戦争や核兵器が如何に恐ろしいか、そして平和や命の尊さである。戦争を二度と繰り返してはならないと心の底から思った。今までは、原爆について映像を見たりすることで理解しているつもりであったが、実際に被爆地の長崎を訪れたことで、それらが全く表面上のものであることが分かった。原爆によって街が破壊された写真や酷い火傷を負った人の写真を見るととても胸が苦しくなり、原爆の恐ろしさを実感した。そのとてつもなく恐ろしい核兵器が、現在、世界中に1万2,121発ある。そして、広島・長崎に落とされた原爆よりも遥かに威力の強い原爆が多々存在している。「平和」を実現するためにも、「核兵器廃絶」が必要となる。長崎を最後の被爆地にするために、そして、戦争が二度と繰り返されないように、あのキノコ雲の下で何が起こっていたのか、そのことを僕は伝えていきたいと思う。

平和への道と私の道



郡山市立大槻中学校2年 太田 有咲

1 派遣研修への参加に当たって

2年前の2月にロシアのウクライナ侵攻が始まった。それは、今まで戦争を身近に感じていなかった私にとって、衝撃的なことであった。少しでも早い終戦を祈っていたのだが、昨年10月にパレスチナ・イスラエルでも戦争が始まった。終戦はいつになるのか。悲観的な考えが脳裏をよぎる。戦争の様子、死傷者の莫大な数をニュースで目にし、自分が何か行動しなければならぬと強く思い、長崎派遣事業に参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

永井隆博士は、白血病にかかり原爆で被害を負いながらも医師として多くの被爆者の救護を行い、平和の尊さや命の大切さを訴え続けた。永井博士は、如己堂で17冊の本を書いたのである。その中の、『花咲く丘』には、「戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけである！平和を！永久平和を！」と書かれている。この文面から永井博士の平和を祈る想いが伝わってくる。自身が病気にかけながらも、平和を訴え続ける永井博士の姿に感銘を受けた。そして、自分も永井博士のように、平和な世界実現に向けて貢献できる人間にならなければならないと思った。

(2) 長崎原爆資料館

今から79年前の8月9日、午前11時2分に、原子爆弾が長崎を襲った。原爆資料館に展示されていたファットマンの実物大模型、11時2分で止まった時計、溶けた6本の瓶、米飯が炭化した弁当箱、怪我を負った写真など、全てのものがその時のリアルな状況を物語る。それら

からは、原爆の爆風、熱線、放射線などの多大な影響が伝わってくる。言葉を失ってしまうほど、残酷な事実だった。そんな残酷な事実が実際にあったのかと想像するだけで、胸が苦しくなる。自分が想像していた被害よりもはるかに悲惨なものだったからだ。今の自分の生活がいかに幸せであるかに気づかされた。今、私の生活は、戦争の犠牲者の上で成り立っているということ学んだ。だからこそ、学んだことを多くの人に伝え、戦争について知ってほしいと思う。

(3) 青少年ピースフォーラム

1日目は、被爆当時11歳だった、松尾幸子さんの被爆体験講話を伺った。松尾さんは、爆心地から1.3kmのところまで被爆され、家族が怪我を負ったり、亡くなったりしてしまったそう。一発の原爆で生活が一変してしまうことを知り、恐怖心を感じた。松尾さんは、核兵器の恐ろしさを知り、一人ひとりが伝えていくことが大切だと語った。戦争のない時代を生きる私たちにとって、戦争を深く理解し、伝えていくことは使命である。私はこれから、松尾さんの言葉を胸に刻んで生活していきたい。

2日目は、班のみんなで「ケンカが起こる原因」、「ケンカ・戦争をなくすために自分にできること」について意見交換を行った。ケンカが起こる原因について今まで考えたことがなかったが、たくさんの人と意見交換することで、違う考え方が見え、自分の考えが深まったように感じられた。



< 平和の泉 >

3 心に残ったこと

原爆による熱風の影響で、水を求めてうめき叫びながら亡くなった人々を想い、平和の泉が設置されている。この平和の泉は、冥福を祈り、世界恒久平和を祈念し、建設されたものだ。平和の泉の正面にある石碑は、被爆当時9歳だった山口幸子さんの手記に書かれていたものである。被爆し、水を求めてさまよったという悲惨な情景が思い描かれる。水が飲みたくても、油のようなものが浮いた水しかない。山口さんは、生きるために飲むという選択をした。飲んだ後も、体に影響を及ぼすのではないかと不安な気持ちであったことは想像できる。

「戦争」というものは、こんなにも悲劇的なものなのかと愕然とした。戦争は大切なものを全て奪ってしまう。戦争は本当に恐ろしいものだ。そのことを肌で感じられたからこそ、多くの人に平和の尊さ、命の尊さを知ってもらいたい。これが私の心からの願いである。

4 派遣研修に参加して感じたこと

太平洋戦争中、「戦争をすることは正しいこと」、「軍隊に入らなければ日本人ではない」などといった誤った認識があったそうだ。多くの人が流され、考えが間違っていることに気づけなかったのだ。そんな失態から、私は人に流されることなく、正しい道を歩んでいくことの大切さを学んだ。私は、正しい道を歩んでいける人間になりたい。

郡山市市制施行 100 周年、核兵器廃絶都市宣言 40 周年という節目の年に、長崎派遣事業に参加し、知識を深めることができたことを誇りに思う。戦争を「恐ろしいもの」という簡単な言葉で終わらせていたが、長崎派遣に参加し、戦争の悲惨さを肌で感じる事ができた。

これから、長崎派遣で学んだことを多くの人に伝えたい。平和な世界実現のための私の一歩だ。

平和への願い



郡山市立小原田中学校2年 景山陽向

1 派遣研修への参加に当たって

私は、戦争は自分には関係のない遠い場所で起こっていることだと思っていた。

昨年度の長崎派遣事業に参加した姉の話を聞いて、戦争は日本でも起こり、多くの人の命が失われていたことを知った。

今この時にも、戦争や紛争が世界では起きている。そこで、私は聞いたことだけではなく、実際に自分の目で見て、肌で感じて、当時の長崎で何が起こったのか、戦争や原爆の本当の恐ろしさについて深く知りたいと思った。そして、一人でも多くの人に伝え、平和について考えてほしいと思い参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

永井隆氏は、長崎医科大学で放射線医学を専門としていた医学博士だった。原爆によって妻を亡くし、自らも重傷を負ったが、被災者の救護活動を2か月間行い、白血病が悪化し寝たきりとなってからも、17冊にも及ぶ本を書き残した。

「どん底に大地あり。どん底まで落ちて、そこから立ち上がることでできたのは、希望をしっかりと持っていたからである。」

(「花咲く丘」より)

長崎は原爆の被害で、この先70年間草木は生えないだろうといわれていたが、1か月後には草木が芽吹いた。勇気と希望を持ち復興に立ち上がっていく、永井隆氏の想いを感じた。

戦争の愚かさ、平和と命の大切さを訴え続けていた人がいたからこそ、今の平和があるのだ。

(2) 青少年ピースフォーラム

平和会館と出島メッセ長崎で行われた青少年

ピースフォーラムでの被爆体験講話では、被爆当時11歳だった松尾さんの話を聞いた。松尾さんは爆心地から約1.3kmの地点で被爆し、本人は無傷だったが自宅は跡形もなく焼け、兄2人、姉、父、兄嫁、叔母2人を亡くした。松尾さんは、二度と愚かな戦争をせず、核兵器を早くなくしてほしいと訴えた。

一瞬で大切なものを奪われてしまう…、考えただけで辛くなった。

意見交換会では、同年代の人達の平和への色々な思いを知ることができた。

「ケンカや戦争が起こる原因は何だろう」というテーマについて、一人ひとり意見を発表し、それぞれのMy平和宣言を考えた。

「相手のことを考えて話し合う。」簡単に出来るように思えて難しいことなのかもしれない。

(3) 原爆資料館

建物の中に入ってすぐに11時2分を示したまま止まっている時計が目に入った。爆風で動いた石像。長崎型原子爆弾「ファットマン」などが展示されていた。特に、溶けた瓶が印象に残った。原爆の熱線とその後の火災で溶け、変形していた。当時その熱線を受けた人々がどれだけ苦しんだのだろう、と恐怖を感じた。

今世界中に、長崎に投下された原子爆弾よりも何十倍も何百倍も強力な核兵器が沢山あることを知り驚いた、やけどや放射線障害で苦しむ人達の写真を目にして、繰り返してはいけない、核兵器のない世界にしていかなければならないと思った。



＜ 旧城山国民学校 ＞

3 心に残ったこと

この写真は、爆心地から西方約 500 メートルの場所に位置していた旧城山国民学校の原爆投下後の写真だ。

最も爆心地から近い国民学校で、被爆当時、校舎は鉄筋コンクリートで建てられていたが、秒速 250 メートルという猛烈な爆風を受け崩壊、焼失し、学校にいた教職員 31 人のうち 28 人、およそ 1,500 人の児童のうち 1,400 人余りが学校または家庭で亡くなった。このほか、三菱重工業株式会社長崎兵器製作所の一部が疎開して学校を使用していたため、その所員や動員学徒等の約 120 人中 100 人余りの人も亡くなった。

被爆した旧校舎の一部は、貴重な被爆遺構として保存され公開されている。

あの日、ここで起きたことを決して風化させてはいけない、忘れてはいけないと思った。

私たちにとって当たり前のように通い、勉強し、友達と笑いあえる場所が、当たり前になっている日常が、一瞬にして吹き飛ばされ崩壊した。

多くの人が亡くなり、どれだけの人が苦しみ、悲しんだのだろうか。想像すると胸が締め付けられて苦しくなった。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の長崎派遣研修に参加して、たった一発の原子爆弾によって命を奪われた人、被爆した人、熱線を受け、酷いやけどに苦しんだ人、崩壊した建物、破壊された環境を実際に見て、戦争の悲惨さを感じ、二度と核兵器が使用されることがあってはならないと改めて強く思った。

今も世界中で戦争や紛争が起きていて苦しんでいる人達がいる。私が何気なく過ごしている当たり前の日常が「平和」なのだと気づかされ、今ある平和な日常を大切にしようと思った。そして、自分だけではなく、友達、家族、周りの人々に戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさを伝え、平和への想いを広げていくことが、長崎を「最後の被爆地」にするために今私たちができることだ。

一人でも多くの人が戦争と核兵器の恐ろしさ、命の尊さと平和の尊さについて考えてほしいと思った。

私は、4 日間の派遣研修を通して学んだことを忘れずに多くの人に伝え続けていきたい。自分一人の力は小さくても、いつか大きなものになり変わり世界が平和になっていくことを願っている。

平和を絶やさないために



郡山市立宮城中学校2年 宗 像 奏 佑

1 派遣研修への参加に当たって

僕がこの派遣研修に参加したきっかけは、昔の日本から、どうやって今の平和な日本になったのか、そのルーツを知る為である。

昨今、ロシアとウクライナの戦争や、パレスチナとイスラエルの戦争が世界で起こっている。日本も昔、戦争をしていたと学校で習った。けれど、そんなことを感じさせないほど、日常が平和だと感じている。そんな今の平和が成り立っているのは、戦時中の長崎での出来事が関わっていると思った。そのため、原爆投下やその後の復興に関することを学ぶために参加することを決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

永井隆博士は長崎医科大学で放射線医学の研究をしていたのだが、白血病になってしまい、余命3年と宣告された。そんな中、8月9日に原爆が落とされ、爆心地から700メートルほどの距離で被爆した。沢山の困難に追われながらも平和の尊さと戦争と核兵器の恐ろしさを伝えてきた、永井隆博士は本当にすごい方だと思う。

そんな永井隆博士の残した沢山のものが、永井隆記念館に展示されていた。その中でも特に印象に残ったものが、永井隆博士の書いた本である。寝たきりになっても書き続けた本は、全部で17冊にまでも及んでおり、平和の尊さを文字で伝えていた。永井隆博士の残した数々のメッセージを見ると胸が痛む。先人の方々が託して下さった当たり前の平和な日常を、いつまでも続くように身近な人から伝えて、繋いでいきたい。

(2) 長崎原爆資料館

資料館には、原爆の被害を受けたものが沢山展示されていた。原爆の落とされた時刻である、11時2分を指したまま動かない柱時計や、熱線により、黒く焦げてしまった硬貨などがあった。また長崎に落とされた原爆である「ファットマン」の実物大の模型もあり、どれも自分の生きてきた日常からは想像がつかない、恐ろしく残酷なものだった。特に印象に残ったものが、溶けてくっついてしまった6本の瓶である。この瓶から原爆の異常なまでの高熱や、恐ろしさを感じられる。中には目をつむりたくなるほどの悲惨な写真もあった。けれど、目をそらすことなく見なければならぬと思い、細部までしっかりと見た。ここで見たり、学んだりしたことを忘れずに伝えていきたい。

(3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、「こぢんまりフィールドワーク」を行ったり、被爆体験講話で被爆者の方から当時のお話を聞いたりした。その中でも戦争の疑似体験をしたことが特に心に残っている。3種類のカードを使い、それぞれ自分の大切な物、大切な場所、大切な人を書き入れた。戦争が激化していくにつれて、行動が制限され大切な場所を失い、家族と離れ離れになって大切な人を失った。その後、原爆が落とされ、自分の住んでいるところが崩壊し、最終的には全てを失った。これは、実話をもとにして作られたものだそう。体験をただけでも胸が締め付けられるような気持ちになったというのに、本当に体験したことがある人がいると思うと、涙を禁じ得ない。日常を簡単に壊してしまうのが戦争であり、原爆なのだと思えた。



< 眼鏡橋 >

3 心に残ったこと

この写真については誰もが一度は見たり、聞いたりしたことがあるであろう、眼鏡橋である。幸いにも、原爆の影響を強く受けなかったため、姿かたちはそのまま残っている。けれど、本当は原爆を長崎に落とす際の第一目標は、浦上地区ではなく常盤橋付近だったそう。常盤橋は眼鏡橋のかかる、中島川にかかっている橋である。もし、当初の予定で落とされていたら、眼鏡橋含め中島川にかかっている石橋は、跡形もなくなっていたであろう。そんな歴史的に重要なものでさえ無差別に破壊してしまう、戦争や核兵器はあってはならないものだと改めて強く思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

僕は長崎派遣研修に行く前は、戦争や核兵器について教科書で学んだり、ニュースで見たりでしか知らなかった。そのため、どこか他人事のようになっていた。けれど、この4日間の派遣事業を通して実際に自分の目で見たり、体験したりすることによって考えが変わった。それは、戦争や核兵器は全く他人事のものではないということだ。もしかしたら一発の爆弾でいつもの日常が崩れてしまうかもしれない。もしかしたら急に戦争が始まって、家族と離れ離れになってしまうかもしれない。そう考えると、どれだけ核兵器や戦争が恐ろしく、許されざるものなのかよく分かった。これからは争いの悲惨さと平和の尊さを、身近な人から伝えていきたいと思う。

平和の尊さと核兵器の廃絶



郡山市立御館中学校2年 横田 絢美

1 派遣研修への参加に当たって

私が、長崎派遣事業に参加しようと思ったきっかけは、文化祭で昨年参加した先輩の話を聴いて原爆について興味を持ったからだ。今までは、原爆の内容は授業で習ったぐらいの知識しかなかった。先輩の話を聴き衝撃を受けた。

たった一発の原子爆弾で、長崎の街が破壊され、多くの尊い命が奪われた。原子爆弾の恐ろしさや戦争の爪あと、自分の目で見て学んだことなどを周りの人に伝えたいと思い、参加した。以前から原爆について興味があり、自分で本やインターネットで調べていた。実際に長崎に行き詳しく学びたいと思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 城山小学校

城山小学校（旧城山国民学校）は、爆心地から西へ500mの場所にあり、最も爆心地から近い国民学校だった。当時学校にいた教職員が28名、生徒は約1,400名が亡くなった。建物は2・3階が全焼した。

今は、資料館として建物を使っている。館内には、当時の校舎の模型や写真、先生や生徒の遺品などが展示されていた。展示されていたものの中で、私が一番印象に残ったものは、被爆したカラスザンショウだ。木の下が黒く焼けていて、強い熱線であったことがよく分かった。

被爆後、学校に行きたくても行けない子ども達がたくさんいたようだ。私たちが今、学校に毎日行くことができるのは、戦争がなく平和であるからだと感じた。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、2つのことが印象に残った。

1つ目は、被爆体験講話を聴いたことだ。原爆を体験した松尾さんは、爆心地から約1.3kmの地点で被爆した。松尾さんは無傷だったが、弟達はケガやヤケドを負い、爆心地から0.7km地点にあった自宅は、跡形もなく焼けてしまった。被爆体験講話を聴き、平和の大切さを学ぶことができた。

2つ目は、室内学習で戦争の疑似体験をしたことだ。紙に大切な物や人、場所を書き、戦況が悪くなるたび、条件に合う紙を手放していった。最後には、手元の紙が無くなった。疑似体験をして、自分の大切な物や人が無くなる怖さや辛さを改めて知った。

(3) 平和祈念式典

平和記念式典には、中継会場の出島メッセ長崎で参列した。

私は、鈴木史朗長崎市長の「平和をつくる人々よ！一人ひとりには微力であっても、無力ではありません。」という言葉が心に残った。この言葉から、話し合いで解決しようとする「平和の文化」を、世界中に広め、長崎を最後の被爆地にするとする思いを強く感じる事ができた。



< 少年平和像 >

3 心に残ったこと

私が長崎研修で心に残ったことは、城山小学校の外にある少年平和像だ。その少年の左腕にはハトがとまっていて、像の周りには、たくさんの千羽鶴が集まっていた。城山小学校や少年平和像などを見て、核兵器を使った戦争を、繰り返されないようにしなければならない、という想いを強くした。

なぜ核兵器を開発したのか。なぜ、人々の尊い命を奪ったのか。被爆した場所に行くたび、疑問と、悲しい気持ちが湧いてきた。

他にも、平和の泉と、その正面にある石に刻まれた少女の手記も心に残った。石には「のどが渇いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが 一面に浮いていました どうしても水が欲しくて とうとう油の浮いたまま飲みました」と、刻まれていた。被爆者たちは、水を求めながら亡くなっていった。この手記を書いた少女も、水を求め、生きるためにあぶらが浮いたままの水を飲んだ。飲まないで死ぬからだ。泉は、水を求めた人々に水を捧げるために建設された。平和の泉と少女の手記から、水の大切さを学んだ。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は、この4日間の研修で、この事業に参加して本当に良かったと思った。授業で習っていなかったことを深く知ることができ、たくさんの人と交流することができた。そして、平和の尊さ、核兵器の廃絶について考え、早く核兵器の無い、平和な世界になってほしいと思った。

平和な世界にするのは簡単ではないが、被爆地の広島や長崎のことをこの事業に参加した私達が訴えれば、少しは変わるかもしれない。広島や長崎のために私達ができることは、原爆の被害を忘れず、学んだことを周りの人に伝えることだと思う。

二度と同じことが繰り返されないように、少しずつ世界が平和になってほしい。

長崎に行き、様々な文化や歴史について、良く学ぶことができた。この事業で学んだことを、今後の生活に活かしたい。

これからも世界平和について考え、平和がずっと続くように今日の研修で学んだことを身近な人に伝えていきたい。また、伝えていくだけでなく、平和を訴えるための他の方法についても探していきたい。

平和な未来へ



郡山ザベリオ学園中学校2年 遠藤 宗介

1 派遣研修への参加に当たって

私が長崎派遣研修に参加した理由は、日本の戦災について学び、戦争の悲惨さや平和の大切さを周りの人に伝えたいと思ったからである。

数年前私は、太平洋戦争の末期、郡山にも大規模な空襲があり、その空襲で自分の親族が亡くなっていたことを知った。それまで戦争は、自分にとって関係のない遠いところの話だと思っていた。しかし、郡山空襲のことを知ってからは、戦争が以前より身近な出来事と感ぜられるようになった。

そんな時、学校の先生から「学校代表として長崎派遣研修に参加しないか」と声をかけられた。昨年の長崎派遣研修に参加した先輩の報告発表では、原爆についてあまり知らなかった私でも原爆の知識や恐ろしさを知ることができた。今度は自分が実際に長崎に行き、現地で学んだことをたくさんの人に伝えたいと思い、研修の参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 城山小学校

城山小学校（旧城山国民学校）は、爆心地から西に500mほど離れた場所に建っている。爆心地から一番近い国民学校だったため、被害は甚大だった。教職員、動員学徒など約130人が犠牲となり、鉄筋コンクリート造りの校舎は、原爆の爆風と熱線火災で大部分が破壊された。自宅にいた児童も、約1,400人が亡くなった。戦後、被爆した校舎は解体される予定だったが、保護活動により階段棟が残され、平和祈念館となった。

平和祈念館には、児童や先生の遺品や原爆投下直後の写真がたくさん展示されていた。その

中で私が一番印象に残っているのは、壁に残る焼け焦げた木煉瓦だ。熱線による火災がどれほど高温であったかが分かり、爆心地近くの被害の恐ろしさが生々しく伝わってきた。このような状況の中でたくさんの方々が犠牲になったかと思うと、胸が締め付けられる思いがした。そして、もう二度と核兵器を使わせてはいけないと強く感じた。

もう一つ印象的だったのは、祈念館に飾られていた寄贈されたたくさんの千羽鶴だ。寄贈している人の中には、実際に被爆された方もいるそう。その千羽鶴からは、原爆で亡くなった方への鎮魂と、世界の平和を祈る気持ちが、胸がいっぱいになるほど伝わってきた。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、戦争の疑似体験というものを行った。大切な人、もの、場所などをカードに書き出して、戦争が起きたらそれらはどうなるのかを体験するものだった。戦争が激しくなるにつれ、自分が書いたものは、空爆により一つ二つと無くなっていった。そして、戦争が終わる頃には全てのカードが無くなってしまっていた。私はこの疑似体験を通して、もし戦争が起きたら、自分の大切な人やものが簡単に失われてしまうということを実感した。さらに原爆が落とされた場所では、爆心地から次々に街が壊されていき、いかに原爆が危険で残酷な兵器であるか痛感することができた。実際にこんなことが自分の身に起きたらと考えると、ただただ恐ろしく、今の何気ない日常がいかに幸せであるかを思い知らされた。



＜ファットマン＞

3 心に残ったこと

これは、8月9日に長崎に落とされた原子爆弾「ファットマン」の実物大の模型の写真である。

長崎原爆資料館には原爆に関するたくさんの貴重な展示物があったが、そのなかでも一番私の心に残ったものは、この「ファットマン」だ。形状が丸かったため「太った男」を意味する「ファットマン」と名付けられた。大きさは、直径 1.52 メートル、長さ 3.25 メートル。重さは 4.5 トンのプルトニウム爆弾で、威力は広島原爆の約 1.4 倍もあった。その自分よりはるかに大きな爆弾の模型を目の当たりにし、驚きを隠せなかった。しかし、長崎の街を一瞬で破壊し尽くしたことを考えると、小さくも感じた。

「ファットマン」は上空 500 メートル地点で炸裂し、7万人もの命を奪った。それでも、長崎の特殊な起伏のある地形のおかげで、被害は小さく抑えることができたそうである。もし別の土地だったら、爆風でさらに多くの人々の命が失われていたかもしれない。そう考えると、とても恐ろしく感じた。やはり、核兵器の廃絶を早く実現させる必要があると思う。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の長崎派遣研修を通して、私は原爆の恐ろしさや平和の尊さについて深く知ることができた。特に原爆の恐ろしさは、現地に行っただけでこそより感じ取ることができたのではないかなと思う。今の時代、どんなこともインターネットで調べることができる。しかし、実際に現地に行き、見て、聴いて、感じるもののほうが、物事をより深く学ぶことができると実感した。

4日間という短い期間だったが、同世代の仲間たちと協力しながら学び、戦争や平和について意見を交わすことができたことは、自分にとってとても貴重な経験となった。さらに、学校代表として参加するという意識を持ち、行動することで、自分自身の成長にもつながったと思う。

「核兵器のない世界」を実現するために、私はこの研修で学んだ原爆の恐ろしさや平和の尊さを、学校の先生や同級生、先輩、後輩、家族など身の回りのたくさんの人に伝えていくつもりだ。

そして、長崎が受けた原爆の被害を過去のものとすることはなく、未来の課題として、たくさんの人と共有していきたい。

平和な社会のために



郡山市立西田学園8年 遠藤朱莉

1 派遣研修への参加に当たって

私の家族には、戦争体験者はいないため、あまり戦争について聴く機会がなく、戦争はどこか遠い昔の事だと思っていた。しかしロシアのウクライナ侵攻やイスラエルとハマスの戦争をニュースで見て戦争や核兵器は恐ろしいものであり、決して他人事ではないと思うようになった。そのような時に、郡山市の主催で長崎派遣事業があると知り、日本が平和維持のためにどんな歩みを重ねてきたのか、その歴史について深く勉強や歴史の関わり方を知りたいと感じ参加を希望した。

2 派遣研修に参加して

(1) 平和祈念式典

私は、平和祈念式典に参列することができ、被爆者の方や長崎市長、長崎県知事、岸田総理大臣の平和への訴えを間近で聴くことができた。

私たち世代は生まれてすぐ、東日本大震災があり、原子力発電所の爆発による放射能漏れの問題を身近に経験してきた。外で遊ぶなどの行動は制限され、甲状腺の検査も受けてきた。

そのような経験から放射能の問題は怖いことだと思い現在まで過ごしてきたので、市長や県知事の「長崎を最後の被爆地に」という言葉に強い感銘を受けた。放射能のことを考えなくてもよい世界になって欲しいと、心からそう思った。

8月9日11時02分には、戦争の犠牲者に黙とうを捧げお祈りをした。79年前、このとき一瞬にして多くの建物や尊い命が奪われたこと忘れてはいけない。

この時亡くなった尊い命には、戦争が終わる

ことを願い、未来へ希望を持って生きていた私たちと同世代の方々も含まれていると思うと、とても辛く悲しい出来事だったことを痛感した。今回の研修に参加して得た学びを皆に伝えていくことが今後、私自身の使命だと思った。

(2) 原爆資料館

研修に行くにあたり事前に読んでいた本に掲載されていた、被爆し命を落とした子どもとの別れを描いた「悲しき別れ—茶毘」という絵を原爆資料館で実際に見ることができた。

この絵は、本の白黒の挿絵で見るとよりも当時の状況を生々しく伝えており、絵の中にいる人たちの気持ちが伝わってきて、この辛い状況を繰り返してはいけないと強く思った。

(3) 青少年ピースフォーラム

特に印象に残った活動は、戦争が起こるとどうなるのかということ、疑似体験を通して学んだことだ。

戦争が続くことによって、自分の居場所がなくなると同時に自分の父親や兄弟が戦争に召集され、生きて帰ってくるのも分からない不安な日々を過ごしていくことに胸が苦しくなった。また身近な人が空襲で命を落としてしまうところを目の当たりにしなくてはならないことも、とても悲しくなった。当時の人たちの苦しみや悲しみを想像することしかできないが、それだけでも身を切られるような思いになった。

このフォーラムでの活動を通して、実際に戦争を生き抜いてきた方々が平和への願いを切に訴える気持ちを少しでも理解することができ、これから生きる私にとって貴重な経験となった。



＜大浦天主堂＞

3 心に残ったこと

私は、大浦天主堂、浦上天主堂という2つの教会が特に心に残った。最初はステンドグラスのきれいな教会というイメージであったが、実際に訪れるとそれは違ったものであった。特に浦上天主堂では、原爆の被害を大きく受けて多数の方々が亡くなっている。しかし、本来であれば復旧、復興もままならない状況であるにもかかわらず、この年のクリスマスイブに焦土の丘で聖鐘が鳴り響いた。ほぼ無傷で掘り出された鐘を永井隆博士が被爆地を元気づける為に鳴らしたものであった。そのような背景を学び考えていくと、いつの時代も長崎の人々の心に寄り添ってきた建物だと知った。原爆により、ステンドグラスやマリア像も一瞬にして破壊されてしまったが、長崎の人々の力により、今では見る者を圧倒する美しい姿に戻されていた。

力を合わせて教会の再建、地域の再生を成し遂げたことに、人間がもつたくましさを感じるとともに、平和な世の中が続き、この美しい教会が長崎の人々を見守り続けてほしいと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は、4日間の研修を通して多くの方々と交流を深め、意見交換をしたり、語り部の方によ

る実際の戦争体験を聴いたりしたことで、「平和」について改めて考えることができた。

被爆地について、本やテレビでの知識としては理解していたが、実際に長崎を訪れて被爆遺構を目の当たりにした時、とても強い衝撃を受けた。戦争が間違いなくあったということを感じ知らされた。また語り部の方の話聴いて、今私たちにできることは、戦争を二度と起こさないこと、平和の尊さを忘れないことだと感じた。私一人の言葉では、ごく小さな発信かもしれないが今回の学びを大切にして伝え続けていくことが使命だと感じた。

そして、語り部の方たちはどんどん高齢化していき、年々減少しているということも忘れてはならない。だからこそ、戦争の悲惨さを理解している人たちが後世に語り継いでいくことが一番大切なことだと思った。

2024年の夏、長崎派遣事業に参加するにあたり学びの意欲や楽しみもあったが正直不安もあった。しかし同じ目的意識を持った仲間とさまざまな体験をすることができ、私の人生において一生心に残るかけがえのない財産となった。

応援し、支えてくれた家族、先生方、事業担当の行政の方々に、改めて感謝の意を表したい。

平和な世界にするために



郡山市立湖南小中学校 8年 加藤 結愛

1 派遣研修への参加に当たって

1945年8月9日、午前11時2分。原子爆弾が長崎に投下された。当時のことは、現在に至るまで語り継がれている。私も、次の世代を担う者の一人として、後輩たちや子どもたちへ伝えていきたいと思い、参加を希望した。

私は社会の授業で、原子爆弾でたくさんの人が亡くなったことや被害が大きく、多くの建物が破壊されたことは知っていた。被爆体験講話では、実際にはどんなに恐ろしいものだったのかを、理解することができた。私の想像をはるかに超えるその惨状を知り、人々の苦痛や苦勞に思いを巡らせることができた。

生き残った人々も心と体に大きな痛手を負い、その多くが被爆者として、今も苦しんでいる。

実際に現地に足を運ぶ機会をいただき、被害の詳しい内容、人々が体験した差別や風評被害などの大変さを知ることができた。

2 派遣研修に参加して

(1) 平和祈念像

平和祈念像のポーズには、意味が込められている。右手は原子爆弾、左手は平和、顔は戦争犠牲者、横にした足は原子爆弾投下直後の長崎市の静けさ、立てた足は救った命を意味し、像は犠牲になった方々の冥福を祈るために建立された。私は、平和祈念像そのものの存在は知っていたが、このような意味があることまでは知らなかった。

ここには、長崎の人々の「戦争を二度と繰り返さない」という、強い願いが込められている。長崎の人々にとって、非常に大切なものということである。

(2) 原子爆弾落下中心地碑

原子爆弾がさく裂した500m下に、この碑は存在している。この周辺に、原子爆弾によって破壊された家の瓦や煉瓦、約3,000度の熱で焼け溶けたガラスなどが、今でも大量に埋没している。

中心地区は、「祈りのゾーン」として、原子爆弾により亡くなった方々の冥福を祈る空間として整備されている。

具体的にどこに原子爆弾が投下されたのかが分かる、重要な資料である。同時に、原子爆弾が頭上でさく裂するということはどういうことなのか、想像を絶する恐怖が頭に浮かぶ。この碑を残し、核兵器廃絶に向けて後世に語り継いでいくことが、私たちの使命であると強く感じた。

(3) 青少年ピースフォーラム

ここでは、被爆当時11歳だった松尾幸子さんの講話を聴いた。

十分な食べ物が無かったことや木造2階建ての自宅が焼失したこと、隠れる場所がなかったことをお聞きした。弟たちは怪我ややけどを負い、父は倒壊した建物の下敷きになって亡くなった。姉に至っては、焼けた家から遺骨だけが見つかったという。兄2人と兄嫁、叔母2人も亡くなったという、悲惨なお話を聞いた。

原子爆弾の被害によって食料が足りなくなったことも大変な苦勞だが、それ以上に、最も悲しいのは家族がみんな亡くなってしまったことだ。松尾さんが経験した辛さを想像すると、私は胸が痛む。

今ある平和が、これからも長く続くことを改めて願うばかりである。



< 平和の想い >

3 心に残ったこと

この4日間の研修で心に残ったことはたくさんあるが、私は最後にこの千羽鶴を紹介したい。

資料館に展示されているこの千羽鶴は、「神のご加護により世界を幸せにしてください」ということに対する、人々の感謝の気持ちを表したものである。

しかし、戦時中は鶴を折る意味合いが違っていた。当時は、「兵士達が死なないように」という願いを込めて、家族や友人が千羽鶴を折っていたという。

願いが叶うと信じて、戦時中の人々は千羽鶴を折った。兵士達、つまり「自分の大切な家族が、死なずに帰って来ますように」と、その想いを表すために家族にできたことは、千羽鶴を折ることだった。

時代が流れ、平和な今、千羽鶴を折る人々の願いは変わった。そこには、戦争の記憶を語り継いだ人々による、平和の想いが込められている。

それでも、世界の他の地域では争いが絶えないことに、私は悲しくなる。二度とこのような惨劇を繰り返さず、世界が平和になることを切に願っている。

4 派遣研修に参加して感じたこと

長崎に行って、原子爆弾の被害や人々の苦しみを、詳しく学ぶことができた。

被爆体験講話では、原子爆弾の恐ろしさを理解できた。原子爆弾で大変な日々を過ごした人々がいる中で、私たちは今、平和な日常を当たり前のように過ごしている。

家族がいて、家があるということは、正直に言うと当たり前のことである。

しかし原子爆弾を一度でも使ってしまうと、全ての当たり前の日常はなくなってしまう。

戦争や原子爆弾による悲劇を二度と繰り返さないために、私という一人の人間にできることは何だろうか。平和に感謝し、一日一日を大切に過ごすということももちろん必要だが、研修が終わった今でも、考えはまとまりきらない。

まずはこの研修で学んだことを、たくさんの人達に伝えていきたい。

原子爆弾を体験し、今でも辛い思いをしている人々が残っていた記録や言葉を、少しでも多くの人に広めていくことが、この世界が平和に近づき、悲劇を繰り返さないようになるための大きな一歩なのではないかと思う。

【表紙・裏表紙に掲載されている祈念碑】



「平和祈念像」(平和公園)

郷土出身の彫刻家・北村西望氏の作で、昭和30年(1955年)に完成。像の高さ約9.7メートル、重さ約30トンの青銅製で、「右手は原爆を示し、左手は平和を、顔は戦争犠牲者の冥福を祈る」という作者の言葉が台座の裏に刻まれている。



「浦上天主堂遺壁」(爆心地公園)

爆心地から約500メートルの場所にあった教会「浦上天主堂」は、原爆による爆風で破壊された。この遺壁は、天主堂南側の壊れて残った壁の一部を移築したものである。



「折鶴の塔」(平和公園)

高さ3mほどの塔。平和祈念像の両側に建ち、平和の願いをこめて折られ届けられた折り鶴を安置している。

「平和の泉」(平和公園)

原爆のため体内まで焼けただれた被爆者は「水を」「水を」とうめき叫びながら亡くなった。

その痛ましい霊に水を捧げて、冥福を祈り、世界恒久平和を祈念するため昭和44年(1969年)に建設された。刻々と変化する水形は、平和の鳩の羽ばたきを形どり、鶴の港といわれる長崎港の鶴も象徴している。



「原爆殉難教え子と教師の像」(平和会館前)

原爆で亡くなった児童・生徒の慰霊のため、昭和57年(1982年)に教職員らによって建立された。上に立つ巨人は原爆の脅威を振り払おうとする姿を、下の子どもたちは平和を叫ぶ姿を表している。

令和6年度 郡山市中學生長崎派遣事業 「2024 ナガサキへのメッセージ」報告書

発行日 令和6(2024)年11月23日

発行者 郡山市・平和を考える市民の集い実行委員会
(事務局:郡山市総務部総務法務課)

〒963-8601 郡山市朝日一丁目23番7号

電話: 024-924-2031

FAX: 024-924-0956

Eメール: soumuhoumu@city.koriyama.lg.jp

郡山市 ナガサキ

検索

印刷製版 株式会社ヨシダコーポレーション

